

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.36

- ～特集 1 博物館のリニューアルを考える～
～特集 2 防災シンポジウムの開催について～



リニューアルした府中市郷土の森博物館の常設展示室

2015.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

【特集 1】博物館のリニューアルを考える	2
●常設展示室のリニューアルを終えて	
府中市郷土の森博物館 花木知子	2
●瑞穂町郷土資料館の新築移転事業	
瑞穂町郷土資料館 丸山志保	4
●スマートフォンを利用した音声ガイドシステムの試験導入	
福生市郷土資料室 青海伸一	6
【特集 2】防災シンポジウムの開催について	10
●シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」 の開催と、事前アンケート調査結果について	
パルテノン多摩歴史ミュージアム 橋場万里子	10
会員館活動報告（順不同）	18
東村山ふるさと歴史館、武蔵村山市立歴史民俗資料館、清瀬市郷土博物館、府 中市郷土の森博物館、日野市郷土資料館、町田市立博物館、青梅市郷土博物館、 檜原村郷土資料館、あきる野市五日市郷土館、立川市歴史民俗資料館、小金井市 文化財センター、コニカミノルタサイエンスドーム(八王子市こども科学館)、首都大 学東京91年館、たましん地域文化財団、奥多摩水と緑のふれあい館、くにたち郷 土文化館、羽村市郷土博物館、調布市郷土博物館、東大和市立郷土博物館、八 王子市郷土資料館、福生市郷土資料室、江戸東京たてもの園、東京農工大学科学 博物館、東京都埋蔵文化財センター、集合住宅歴史館、狛江市立古民家園(むい から民家園)、多摩六都科学館、国立天文台天文機器資料館、国立ハンセン病資 料館	
東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿	38

常設展示室のリニューアルを終えて

府中市郷土の森博物館 花木知子

■はじめに

1987年(昭和62)4月に開館した府中市郷土の森博物館は、本年度で28年目を迎えた。この間、博物館が社会から期待される役割は変化し、幅広い世代が活用できる場所であることが求められるようになった。このため人文系の博物館でも、参加・体験型の展示の導入を図る必要が生じてきた。また、開館以降に行われた発掘調査や資料の調査研究により、府中市の歴史に関して様々なことが明らかになった。

このことから、最新の研究成果を市民に還元し、時代のニーズに即した参加・体験型の展示を取り入れた常設展示室とすることを目的に、当館では2007(平成19)年度よりリニューアル工事に着手した。当初は5か年で完成する計画だったが2008年のリーマンショックに端を発した景気後退により3年目以降の工事が凍結。様々な働きかけの結果、残りの3か年分を1か年で行うことが決まり、2013年度からリニューアル工事が再開、2014年10月4日に一般公開にいたった。

当館の常設展示室のリニューアルはすでに終了した事例ではあるが、その経緯や意図などを明示することにより、本号のテーマである「博物館のリニューアルを考える」一助となるのではないかと考え、ここに紹介することとする。

■リニューアル完了までの経緯

当館が、常設展示室のリニューアルに向けて始動したのは、開館から8年後の1994年度のことであった。当初は研究の進展などを鑑み、十数年をめどにリニューアルを考えていた。そこで、改装計画やコンセプトの作成に着手したものの、府中市の事業実施計画に博物館のリニューアルが掲載されたのは、それから10年後の2004年度であった。翌年、業者選定のための企画コンペが6社参加のもと実施され、委託業者に決まった丹青社と2006年3月に基本設計を作成した。

2007年度からリニューアル工事がスタートし、2008年度に「くらやみ祭」コーナー、2009年度に「こども歴史街道」「体験ステーション」「企画展示室」が完成した。その後3年以上の停滞を経て、本年度「ムラのはじまり」「古代国府の誕生」「国府から府中へ」「宿場のにぎわい」「変わりゆく府中」「都市と緑と」のコーナーが一気にオープンした。

■リニューアルの基本方針と実施事項

リニューアルの具体的な内容に入る前に、まずリニューアルの5つの基本方針を紹介し、「⇒」の後にそれに基づいて実施した事柄を記す。

1. 地域博物館として、地域の特性を活かした展示コンセプトとストーリーを創造する。
⇒「府中らしさ」をあらわすために府中を象徴する3本の柱を設けた(3本の柱については次節に記載)。
2. 参加・体験型展示を導入し、誰もが感覚的に学べる展示空

間を創出する。

⇒子供が興味を持てる内容とすることを心がけ、多くのハンズオンを作製した。

3. 実物資料を重視し、観やすさを追求する。

⇒資料保存を考慮しながら、極力実物資料を展示した。

4. ユニバーサル・デザインを取り入れ、あらゆる利用者にかかれた展示空間を創出する。

⇒色覚障害を考慮して、色のみで識別するような表示をなくし、展示に沿って設けたテーブルの下は、車いすが入る空間を確保した。また、外国人の観覧者のために、解説パネルやキャプションの一部に英訳をつけた。

5. 展示替えやソフトの更新のフレキシブル性と、ランニングコストの低減に配慮した設計とする

⇒展示替えが容易な空間づくりを目指し、解説パネル類は展示替えを想定した仕様とした。また、以前の常設展示室の後方部分109㎡に企画展示室を作り、可変的な展示スペースとして、年3、4回の企画展示を行うこととした。

■府中を象徴する三つの柱

基本方針の1において記した「府中らしさ」をあらわす3本の柱とは、すなわち「くらやみ祭」「国府」「宿場」である。常設展示は恒常的であるからこそ、その博物館をあらわす顔となる。以前の常設展示は、時代の流れにそって、関連資料を多数展示するという手法をとっていたが、新しい常設展示は、上記3つのテーマを核とする、メリハリのある内容とした。

さらにこの3つの柱を「都市の成立ちと展開」というキーワードで繋ぎ、全体のストーリーを構成した。原始に人が定住を始め、古代に武蔵国の国府が置かれて政治の中心地となると、府中のルーツともいべきマチが形成された。そのため、中世には合戦などの舞台となったが、近世になると甲州街道の宿場町として地域の中心地となり、現代の府中に繋がるマチの骨格が形成される、という筋書である。そして、この都市としての歴史と、人々の繋がりを伝えるものとして「くらやみ祭」を位置付けた。このことから、常設展示室の冒頭に「くらやみ祭」のコーナーを設け、観覧者はまずそこを通り抜けてから、府中の歴史に足を踏み入れるようになっている。

■模型とジオラマ

それでは、ここから展示物について少し触れてみたい。

今回のリニューアルで心がけたことのひとつが、視覚的な理解が図れる展示にすることであった。その結果、模型とジオラマを多く用いることとなり、各コーナーに数点が展示されることとなった。

このうち、くらやみ祭の山車、縄文早期のムラ、国府のマチ、および高札場の模型とサイノカミは新たに作製し、熊野神社古墳と府中宿の街並模型は、一部を改修・増設した。国府のマチ

の模型は、国衙を中心とした東西3.2km、南北2.2kmの範囲の景観を1/450で表現したもので、その大きさは7.3×5mにも及ぶ。高札場の模型は現存している高札場の図面と、安政7年(1860)の仕様帳をもとに江戸時代末期の高札場を約65%で再現し、実物の高札を掲げた。府中宿の街並模型は、府中御殿の研究成果を取り入れて府中御殿の跡地を含む1.3×2.43mを増設した。

これらの模型は、長年にわたる発掘調査や研究成果を取り入れたもので、当館学芸員の設計・監修のもとに作製した。高札場や模型内の建造物など、建築を専門とする人の助言を仰いだ方が良いのではないかと思う部分もあったが、担当者が学びながら、検討しながら造り上げた。

府中の自然を展示する「都市と緑と」のコーナーでは、段丘崖・多摩川・浅間山・市街地をジオラマで表現した。樹木は実物を使用し、葉や林床の植物はレプリカのサンプルとなる植物を2年かけて採集した。各ジオラマには、植物や昆虫、野鳥を配置し、自然の一部を切り取ってきたような景観を作り上げた。また「変わりゆく府中」のコーナーには、家屋内部のジオラマを作り、そこに神棚や盆棚を再現した。

模型やジオラマによって形で示すことは、視覚的な理解を促すことができる反面、見たものが即ち真実として受け取られかねない。それだけに、これらの製作に関しては、各担当者が特に多くの注意を払い、様々な考察・検討を加えながら組み立てることを心がけた。

■市民協働

この考察・検討の過程や展示物の製作において、多くの市民の協力を得たものがある。本館の常設展示室へと続く階段を登ってすぐに展示してある、くらやみ祭の万灯と山車の模型、および「変わりゆく府中」コーナーにある直径3.5m、高さ6mサイノカミである。

万灯は、万灯大会を主催する青年会の呼びかけに応じて、多いときには各町の青年会5、60人が博物館に集まり作製した。また、1/10の縮尺でつくった山車の模型は、多くの市民の助言のもとに調整をおこない、半纏や提灯による役割分担など、町内のコミュニティを反映したものとすることができた。

サイノカミは、車返(白糸台)青年会延べ100人以上の協力者のもと2日間かけて製作した。このサイノカミに使用した藁にも、当館の体験事業である「こめっこクラブ」に参加した子供たちが栽培したものが多く含まれている。

これらは市民の協力なくしては、作り得なかった展示物であり、地元に着した博物館の活動が実を結んだ成果だと考える。このような市民協働は、近年博物館に求められることであり、市民とともにつくった常設展示室は、今回のリニューアルの目的に適ったものだと言える。

■学校教育との連携

最後に、リニューアル後の常設展示室の活用として、学校教育との連携について触れておきたい。「子ども歴史街道」と「体験ステーション」は、子どもへの教育普及を目的としたもので、



常設展示室「宿場のにぎわい」コーナーの様子

基本方針の3で謳ったように、楽しみながら学べる参加・体験型展示を多く取り入れた。

「子ども歴史街道」は、常設展示室の壁面60mを利用して、時代を追って府中の歴史が学べるようになっている。ここでは、各時代の府中を象徴するキーワードをわかりやすく解説し、それを理解するのに有用なハンズオンを数点配置した。「〈みて〉〈ふれて〉〈きいて〉そして〈かんがえる〉」というキャッチフレーズのもと、遊びながら歴史に興味を持てるような仕掛けを施している。

一方「体験ステーション」には、昔の道具、土器や石器、植物標本などを置き、手にとって見られるようにした。国司の衣装や羽織・袴などを着られるコーナーもあり、子どもだけでなく大人も楽しめるように工夫をこらした。

学習利用で一番多いのは、小学校中学年の「昔の道具と暮らし」を学ぶ単元である。しかしリニューアルにより、昔の道具に関する展示スペースは以前より縮小することになった。このため、昔の道具類を入れた箱をバックヤードに置いて、利用の際に持ち出したり、園内の復元建築物を用いた学習を考案したりするなど、提供する情報量が減少しないように努めている。

また、それ以外の単元における学習利用の促進を図るため、来年度に教員を対象とした博物館利用講座を開催する。ここでは、学校の指導要領に則った様々な利用方法を提示するとともに、教員から博物館に対する要望を聞き、連携の強化に繋げたいと考えている。

■おわりに

本年10月にリニューアルは完了したが、その時点から今後の活用の促進という新たな課題がスタートした。リニューアル後の常設展示室をどのように発展させていくのか、また、府中市内外の人にいかに利用してもらおうのかということを常に意識していかなければならない。その意味において、今後も細かいリニューアルを継続し、発展的な常設展示室としていく必要があると考える。

※2009年度までのリニューアルについては、『博物館研究』2008年No.10・2009年No.12に紹介されている。リニューアル事業全体に関しては、当館の紀要28号などで紹介し、記録化を図る予定である。

瑞穂町郷土資料館の新築移転事業

瑞穂町郷土資料館 丸山志保

1 はじめに

本稿は、昨年11月16日にリニューアルオープンした瑞穂町郷土資料館(愛称:けやき館)の新築移転事業についてまとめたものである。筆者は平成25年(2013)4月より当館に勤務し、常設展示製作や収蔵資料の輸送等、新築移転事業に関わる多くの業務の主担当となった。筆者が携わった業務の一端をここに紹介する。

2 瑞穂町郷土資料館の概要と新館建設構想

当館の前身である瑞穂町郷土資料室は、昭和43年(1968)に瑞穂第三小学校の一室に開室した。ここには、昭和41年(1966)から町内で収集された民俗資料が保管されていた。それらの資料と、町史編纂時に収集された歴史・民俗・考古資料や研究成果等をもとにして、昭和52年(1977)11月、瑞穂町図書館の3階に瑞穂町郷土資料館が開館した。この資料館は、総面積が約300㎡で、現在の資料館のおよそ7分の1の広さしかない小規模な資料館であった。

開館から30年以上経過して、当館は建物の老朽化やバリアフリー設備が整っていないこと、そして収蔵資料の増加による収蔵場所の不足等様々な問題を抱えるようになったことから、新しい郷土資料館を建設することが決まった。そのような折、瑞穂町は、平成22・23年度に町の社会教育施設「耕心館」と少年サッカー場に隣接する3950.66㎡の土地を購入することができ、そこに郷土資料館を新築して、耕心館と一体管理をする計画が持ち上がった。米軍横田基地を抱える瑞穂町は、防衛省の補助を得て、新築移転準備を進めていった。

3 設計から施工へ

平成22年度に始まった用地買収は、平成23年度に完了し、平成23年度には基本設計を、平成24年度に実施設計を行った。新館は、隣接する耕心館にあわせて、母屋と蔵をイメージした地上2階建て鉄筋コンクリート造の建物を建設することとなった。常設展示は、「みずほのお宝を見つけよう!瑞穂町 わかると興味がわく、ますます好きになる」をコンセプトとして設計され、「体

験性重視」などの設計方針が示された。

また当館は、瑞穂町が進めている第4次瑞穂町長期総合計画の拠点施設という位置づけとなり、観光情報も発信する役割を担うこととなった。

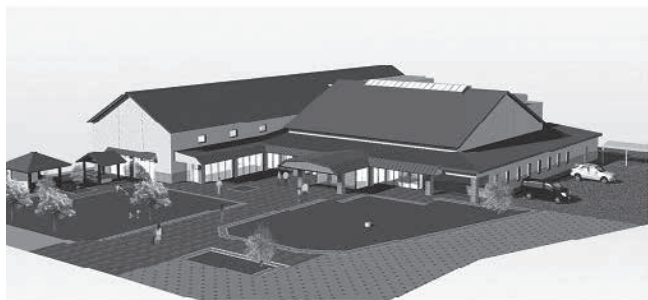
実施設計終了後、平成25年(2013)6月に工事の請負業者が決定すると、同年7月19日に起工式が行われ、8月下旬から工事が



建設中の郷土資料館

開始された。工事期間中は、大雪などの自然災害に見舞われたこともあったが、平成26年(2014)6月末に無事に建物が完成した。

工事と並行して行った展示製作は、当初の設計から一部変更して、町の産業等の展示を加えて瑞穂町の特色がよくわかるような展示内容とした。常設展示のメインテーマは「瑞穂の自然と歴史」である。常設展示を製作するにあたって意識した点は、展示更新がしやすいものにする点である。その理由は、製作期間が限られていて展示内容に関する調査研究が十分でなかったことや、研究が進んでいない分野も多くあることから、今後の研究成果を展示に反映しやすくするためである。例えば、「瑞穂の自然と生きもの」のコーナーでは、マグネット付きのパネルを使用している。展示替えを行う場合は、解説や写真をマグネットシートに出力すれば容易に貼り替えられる仕様となっている。このほか、「瑞穂の歴史と文化」エリアのほとんどの解説パネルは、木製のルーバーに引っ掛けるタイプのもので、貼り付けられてい



瑞穂町郷土資料館 完成予想イメージ図



マグネット付きのパネル

るパネルを交換するだけで展示替えが可能となる。

展示工事は平成26年(2014)9月末に終了し、その後、常設展示の設営をしながら開館記念企画展の準備や旧郷土資料館(以下旧館)からの移転作業等を行い、11月16日の開館日を迎えた。

4 開館後の運営と見えてきた課題

当館は、開館から1か月で3,087名の来館者数を記録した。これは、旧館の約3年分の来館者数に相当する。新しい郷土資料館にバリアフリー設備が整ったことで、今まで来館することが難しかった高齢者なども来館できるようになった。来館者は高齢者が多いものの、小学生や家族連れなど様々な年齢層がいる。特に子ども向けには、ワークシートやぬりえを用意し、ワークシートに取り組むと参加賞として当館オリジナルメモ帳を配布している。また、ぬりえは季節や年中行事にあわせて、いくつかの種類を用意する予定である。例えば11月・12月は、町の特産品であるシクラメンのぬりえを用意して好評を博した。こういった新たな取り組みに加えて、旧館の頃からの取り組んでいる歴史講演会や郷土研修会、ミニ展示なども引き続き実施していく予定である。

このように少しずつであるが、館の業務を進めているものの、開館から1か月半が経過して、様々な課題にも直面している。まず、指定管理者を導入して行われている運営についてである。当館は平成26年(2014)10月から指定管理者制度を導入し、指定管理者の職員5名と、筆者を含めた町の職員3名とで運営を行っている。しかし、指定管理者のほとんどの職員は新築移転事業に携わっていないため、町の職員が一から教えなくてはならず、資料館の運営がスムーズにいかないことも多々ある。開館から1か月半が経って、お互い仕事にも慣れて少し落ち着いてきたものの、仕事分担が曖昧な点等、まだまだ課題は山積している。

次に、展示業者がデザインを重視したために、使いづらいケース等ができてしまったことである。一例を挙げると、多摩だるまのコーナーでは、体重をかけると抜ける恐れがあるパネルを使用しており、そのような危険なパネルの上に木製の板を敷いて上に乗って、多摩だるまが展示してあるケースの重いアクリルを持ち上げて設営を行わなければならないという問題がある。この多摩だるまの展示方法は、展示業者との協議の末に出来上がった



多摩だるまの展示コーナー

ものであり、確かに更新可能ではあるが、それが容易ではないことが実際に使用してみてよくわかった。町内の5軒のだるま屋が作った多摩だるまを一つのケースで見ることができ、見栄えは良いのだが、パネル・展示ケースの仕様や使い勝手については、もっとよく協議するべきであったというのが反省点である。

そして、コンセプトの一つであった体験性重視の展示は、展示資料をもとに作った土器パズルや、鳥の鳴き声クイズのように好評を得ているものもある一方で、町内で生きものを見つけたらその目撃情報を記入する目撃マップ等、こちらの意図が来館者に伝わりづらく、あまり体験してもらえないものもある。こちらの意図をよりわかりやすく説明するなど、体験性重視の展示にも改善すべき点がいくつか見えてきた。

5 おわりに

本稿では、当館の新築移転事業について振り返り、開館後に見えてきた課題を確認した。運営していく中で課題は山積しているが、先人たちが守り、伝えてきた収蔵資料を、よりよい環境で後世に伝えていけるようになったと実感することも多い。

当館の移転新築事業は、町民の方をはじめ、他市町村の博物館など多くの方々のご協力なくしては成し遂げることはできなかった。ご協力いただいた方々には、この場を借りて、厚く御礼を申し上げます。今後は、今回確認した課題を解決しつつ、館の運営をより発展させられるよう微力を尽くしたい。

スマートフォンを利用した音声ガイドシステムの試験導入

福生市郷土資料室 青海伸一

はじめに

福生市郷土資料室は開館より34年が経ち、施設の老朽化なども進む中、限られた展示室の条件の中にあっても利用者に対するサービスの向上を図るため、平成26年度の秋の企画展示(9/6～11/24)においてスマートフォンを利用した音声ガイドシステムを試験的に導入した。

今回この音声ガイドシステムについて報告の機会をいただいたので、システムの概要や、導入にあたって意識した点などを紹介したい。また、合わせて試験導入によって見えてきた課題や、博物館活動の課題などについても紹介し、今後の参考になることを期待したい。

スマートフォンを利用した音声ガイドシステムの概要

今回試験導入をした音声ガイドシステムは、福生市郷土資料室のホームページ上に、MP3形式の音声データを掲載し、そのデータを利用者のスマートフォンで再生することによって、音声ガイドとして機能させたものである。

特徴としては、利用者が所持するスマートフォンを再生用の端末として利用することで、音声ガイド専用の端末等を用意することなく音声ガイドサービスを導入することができた点が挙げられる。

また、音声化にあたってはある程度の聞きやすさを確保するため、一定の技術を有し、福生市議会だよりの声の市議会だよりを作成している実績もある、市内音訳ボランティア団体の「福生いとでんわ」に依頼し、無償での協力を得て実施した。

つまり、システムの導入にあたって必要となる機器等を用意する初期費用をかけず、音声化自体も無償での協力を得て、既存のホームページの活用と職員の努力の範囲内で、予算を伴わずに実施した事業といえる。

導入にあたって意識したこと

まず、ある程度の聞きやすさは必要条件と考えた。これは、例えば展示で考えるなら、どんなにすばらしい内容の展示があつたとしても、パネルが曲がっていると、パネルの内容よりもパネルが曲がっていることに気が向いてしまい、肝心の中身に集中できないという経験をしたことはないだろうか。音声ガイドについても、より展示の内容などについて知りたいと思って聞いている時に、アクセントやイントネーションなど話し方に違和感を覚えるようであれば、展示の内容よりも音声に対する違和感の方が優先してしまい展示の中身に集中できなくなると考えたからである。

さらに、音声ガイドを聞こうとするとき、横に同じ内容が書かれた解説文が置いてあつたら、もはや音声で聞く意味は無いと考え、今回の展示ではあえて音声ガイドの原稿と重複するような解説文は用意しないことにした。

加えて、一人で資料を見ているだけではなかなか気づきにくい

資料の細部に目を向けてもらえるような原稿作りを意識したつもりである。

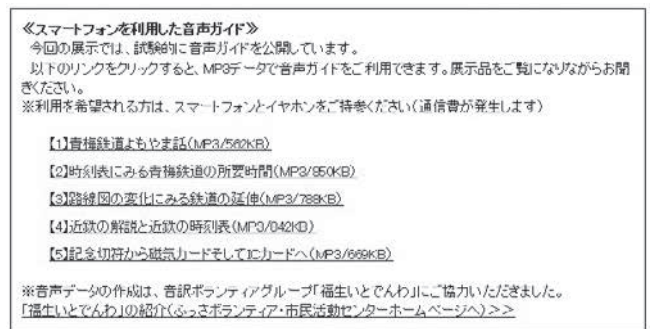
実際の導入状況

実際の展示にあたっては、まず事前に広報やポスター、チラシ、ホームページなどで企画展示の案内をする際に、スマートフォンを利用した音声ガイドを試験導入することを告知した。

また、企画展示初日に間に合うように、福生市郷土資料室ホームページの企画展示の紹介ページに音声データを掲載した。掲載にあたっては、スクロールしなくても見える比較的上部へ音声データを配置するとともに、音声データを掲載した部分に囲いをするなど、ホームページにアクセスした際にもすぐに音声データの掲載場所が判るように工夫した。



音声ガイドを掲載したホームページ画面



音声ガイドを掲載した部分(拡大)

次に、展示室内では比較的目標つ場所に音声ガイドシステムを試験導入していることの告知文を掲出した。告知文には、音声データが掲載されているホームページ画面へ直接アクセスできるQRコードを掲出した。

そして、実際に音声ガイドと対応する展示物のそばに、音声ガイドが存在することを示すスピーカーマークを掲出した。

展示室でのスピーカーマークの掲出にあたっては、福生市郷土資料室では展示室の構造上、展示担当者が意図する順路とは逆回りに来館者が見学することも多いため、間違っただけで一番初めに見ることの多い展示物のそばに、あえて5とかかれたスピーカーマークを配置した。これにより、想定順路と逆回りをはじめた人に、「あれ？1番はどこにあるのだろう？」と思ってもらいたいと考えたのである。

そういう意味では、音声ガイド導入に伴うスピーカーマークの掲出方法を意識的に行うことで、本来の目的とは異なるが、順路表示として機能する可能性も見えてきたところである。



実際に掲出したスピーカーマーク



展示室の様子

試験導入によって見えてきた課題

第1の課題は、展示室内でスマートフォンの使用を認めることになるため、音声ガイドを聞くためにスマートフォンを操作している人と写真撮影をしている人との区別がつかなくなることである。

福生市郷土資料室では、原則として展示室内は撮影禁止としているが、スマートフォンにはカメラ機能が搭載されているものがほとんどのため、その区別がつきにくい。資料保存の観点ではフラッシュをたかなければ問題ないかもしれないが、一方で借用資料がある場合の取り扱いなどには注意が必要となる。

第2の課題は、福生市郷土資料室の利用者のうち、どれほどの人が音声ガイドシステムを利用したいと考えているのかということである。

これは福生市郷土資料室特有の課題である。というのも、福生市郷土資料室は中央図書館に併設されている施設のため、他の博物館に比べ、通りすがりにフラッと立ち寄っていく来館者が一定数存在している。その人たちは、展示内容に興味があるから来館しているとは限らないため、音声ガイドを聞こうというほど関心を持ってはいないのである。上野の博物館のように「高いお金を払って、しかも並んででも見たい！」というような意識の高い来館者とはやはり違う。そのあたりのギャップをどう考えるかという点である。

以前からフラッと立ち寄っていく来館者が多いということは認識していたが、今回の試験導入によりその傾向の高さを再認識した。福生市郷土資料室のスタンスとしては、一人でも多くの方に興味関心を抱いてもらうためのきっかけ作りをする場所になれば良いのではないかと考えており、その方向性が間違っていなかったことを証明したともいえるが、音声ガイドの必要性という根本的な課題に気付いてしまったのである。

第3の課題は、実際の展示におけるスピーカーマークのあり方について挙げることができる。

音声ガイドシステムの導入は初めてのことであり、展示ならびに音声ガイドシステムを企画した者としてはそのことに対する意識が強く働いていたため、スピーカーマークはとても目立つ存在であった。しかし、導入後に一利用者として他館での音声ガイドを利用してみると、展示物に意識が集中してしまい、音声ガイドのスピーカーマークの存在に気づかないことがしばしば起きたのである。

そういう視点で自館の展示室を改めて見てみると、スピーカーマークは思っているよりも小さくて気づきにくい存在だったと反省した。本来の展示物やキャプションなどより目立つことが嫌で、無意識のうちにスピーカーマークが小さくなっていったのであろう。今後の導入にあたって、マークの大きさをどうするかということは大きな課題となった。

いただいた意見から見えてきた課題

今回の音声ガイドシステムの試験導入後に、三博協の研修として本システムを取り上げ、システムの紹介ならびに導入手法の公開を行うとともに、博物館関係者の視点から貴重な意見をいただいた。好意的な意見もいただいたが、システムを取り巻く課題も指摘されたので、それらの中から3点ほど取上げてみたい。

①スマートフォンを所持していない人に対する対応

公立館として利用者に対する公平性の確保の観点から、スマートフォンを所持していない人に対するフォローをどう考えているのかという指摘がなされた。

今回の試行では先にも触れたように、音声化した内容を一切文字化していなかった。今後の導入にあたっては紙に印刷した配布用シートを用意するか、ホームページ上にPDFデータを掲載するなどの手段を検討する必要がある。

ただし、個人的には紙に書かれたものをただ配布してもその場で見る人は少ないし、文字面ばかりに集中してしまい、せっかく目の前にある実物資料を見なくなってしまうというのは大変にもったいないと考えている。展示にありがちな解説を読んで展示を見たような気になってしまうのは、個人的には本末転倒だと考

える。展示室の文章を減らしている代わりに音声ガイドシステムによって補っているという運用を目指すうえで、文章化については慎重に検討したい。

そういう意味で、スマートフォンを所持していない人に対するフォローとしては、家庭で不要になった携帯型音楽プレイヤーなどに音声データを入力したものを用意し、貸し出すといった方法が有効かもしれない。ただし、こういったツールを用意しても、福生市郷土資料室では音声ガイドシステムを聞いてみたいという需要が少ないように感じるので、具体的な導入については今後の課題といえる。

②スマートフォン対応ページやアプリの開発

音声を公開しているホームページについて、スマートフォン対応のページの作成や専用アプリの開発などは考えなかったかという意見をいただいた。

今回の試験導入にあたっては、福生市郷土資料室にある既存のシステムをそのまま利用することで音声ガイドとして機能させることができるのかということが最大の課題であった。そういう視点で計画、準備にあたったため、特にスマートフォン対応ページやアプリの開発といった対応には至らなかった。また、それらを行うには時間的な制約があったのも現実である。

ただし音声公開するページをどのように設定するかということについてはいくつかの検討を行った。例えば、1つ1つの音声に直接アクセスするQRコードを、スピーカーマークの近くや展示ケースの前に掲示する方法である。また、実際に行った企画展示の説明ページ内へ音声データを掲載するのではなく、別に音声データだけが掲載された音声ライブラリーのようなページを作成することも検討した。

結論としては、まだまだ知名度が高いとはいえない福生市郷土資料室のホームページの認知度を高めるという効果を期待し、通常作成する企画展示の紹介ページへ音声データを掲載することとした。また、そのことによって、ホームページ上からこの展示の情報を得た方に対しても音声ガイドシステムの存在をアピールできると考えた。

また、アプリについては、アプリの内容をどうするかといったことを考える以前に、アプリをダウンロードしてまで聞きたいかという点が最大のポイントと考えた。フラットと立ち寄る利用者が音声ガイドまで聞きたいかという課題にも通じるが、アプリをダウンロードしてまで聞きたいという人がどれくらいあるか疑問が残る。このことは、システム導入以前からアプリ利用に対して心理的な壁が存在すると個人的にも感じる部分があり、積極的な検討には至らなかった。簡単に聞けるなら聞いてもいいかなと思ってもらえるような操作性の実現を重視したといえる。そのため、QRコードでは音声ガイドが掲載されたページに直接アクセスさせ、展示室と同じ番号を選べば音声流れるという構成になった。

心理的な壁という点で考えると、先に提案した貸し出し用携帯型音楽プレイヤーの導入も、音声ガイドを聞くために職員に声かけなければならぬという心理的な壁が存在するように感じる。福生市郷土資料室の利用者の実態からすると、そこまでして聞かなくてもいいかなと思ってしまうように感じる。そういう意味で考えると、せつかく音声ガイドを用意し、少しでも多くの人

に展示内容に対し興味を持ってもらいたいと考えた時、スマートフォンを利用した音声ガイドシステムというのは、利用者にとって心理的壁を低くしてくれる便利なツールといえるのではないだろうか。

③自前で音声データを作成しても良いのでは

機材等の条件が整っていれば、音声に対する細かな指示や校正の手間などがかからないうえ、過去の例でもアクセントが気になるといった意見などを聞いたこともないので、音訳団体などに依頼せずに自前で作成しても良いのではないかという趣旨の意見をいただいた。

仮に現在機材や人材が整っていて自前での作成が可能だとしても、いつまでも音声データを作成できる技術を有した職員に異動がないとは限らない。また、音声のデータ化に必要な機器の変化が早すぎて機材が対応できなくなる可能性も存在する。そうなると、音声化を担当する職員の後任が話すことに自信がなかったり、機械に弱かったり、また機材が対応できなくなったりした時には、音声ガイドシステム自体をやめる方向に進んでしまう。その点外部の団体に依頼する方法なら、博物館側の都合によって音声ガイドシステムの運用に影響を与える可能性は低くなる。事業の継続性という意味では外部の音訳団体に依頼するという選択肢は有効ではないだろうか。

また、展示物や展示内容に集中してもらうためには、音声も一定の技術を求めるべきだというのが個人的な考えである。博物館関係者に日本語のアクセントなどが専門と言う人はそう多くないだろう。であれば、比較的身近で協力を得られる音訳団体と手を組むことは効果的である。

アクセントがおかしいといった意見を言う人は確かに少ないかもしれない。それでもアクセントなどが間違っていれば聞く人に違和感を与えることは事実なのだから、事前に打てる手は打っておくべきだろうと考える。

さらに副次的な効果ではあるが、音声化に協力いただいた音訳団体は、従来の博物館利用者とは違う層でもあり(団体の中にも個人的に利用している人はもちろん存在するが)、協働で事業に取り組むことによって、博物館に関心を持つ新たな層の獲得にもつながったと考える。

現に今回音声化を担当した方は、展示初日に家族で来館してください。そういう波及効果も含めれば音訳団体に依頼することにも相当の意義があるだろう。

今後の展望

今回試験導入した音声ガイドシステムは、多少の手間がかかることと、展示室内でのスマートフォンの利用(特に写真撮影の問題等)を認めるかなど、いくつかの条件さえ整えられれば、予算を伴わずに各館でも導入できる。もちろん展示の企画、準備をしながら音声ガイドにまで頭を回すのはなかなか大変な作業である。しかし、常設展示であれば既に展示もできあがっているし、展示解説などで話している内容などの蓄積もあることから、展示と音声ガイドの親和性は高いように感じる。

そういう点も踏まえ、福生市郷土資料室としてもまずは常設展示部分での音声ガイドの本格導入を早急に行っていきたい。導入にあたっては、常設展示部分に決まった順路が存在しないの

で、音声ガイドの順番をどのように表示するか(スピーカーマークをどうするか)といった課題や、音声ガイドを掲載するページをどのように構成するかといった課題をもう一度整理し、利用者にとって使い勝手の良いシステムを構築している最中である。

さらに、福生市郷土資料室では文化財保護行政も担当していることから、市内にある文化財の現地解説板に新しくQRコードを付け加える形で、文化財の音声ガイドなどへも事業を拡大できるよう準備を進めている。当面こちらの音声ガイドの紹介は、解説板にパウチをした音声ガイドシステムの案内を貼り付けることでの対応を考えている。これは、QRコードの考え方が5年後10年後も一般的なものであるかどうか判らないため、将来的な変化にも対応しうる形を検討した結果である。

福生市郷土資料室におけるスマートフォンを利用した音声ガイドシステムの運用は、まだ動き始めたばかりである。今後も利用者や関係者など多くの方からご教示をいただき、より良いシステムとなるよう努めていきたい。

まとめに代えて

出来上がってしまったばかりのシステムではあるが、そこに至るまでにはいくつもの材料を適切に結びつけていくという大きな発想の転換が必要であった。そして試験導入という形での導入を通して、一定の課題も見えてきたところである。

また、既に何度も触れたが、福生市郷土資料室の利用者で音声ガイドシステムを必要としている人や聞いてみたいと思う人がどれくらいいるのか定かではない。だからといって、1人でも関心をもってもらえるならば、博物館サービスとして質の高いものを提供していくということは、博物館のこれからのあり方を考える上で重要な視点となろう。まして、特に今回のシステムのように、予算を伴わないで実施できる事業であれば、どんどん推し進めていくべきである。費用対効果を考えるとき、0円で行う事業であれば、1人の人が満足してくれるだけでも効果は大きい。

今回説明する機会をいただいた音声ガイドシステムは、福生



現在準備中の音声ガイドの案内(イメージ)

で始めた事業かもしれないが、地域博物館で共通して使える基盤であり、博物館サービスの拡充に資するものである。そして、こういった取り組みが福生に限らず多摩地域全体へと広がっていけば、利用者にとっても当たり前のように使えるシステムへと飛躍するかもしれない。

展示室のリニューアルは予算の問題等を中心になかなか難しい面があるが、皆で知恵を出し合い、ソフト面での新たなサービスを今後も提供していきたい。

シンポジウム「多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携」の開催と、事前アンケート調査結果について

パルテノン多摩歴史ミュージアム(公益財団法人多摩市文化振興財団) 橋場万里子

1. 企画までの経緯

平成23(2011)年の東日本大震災以降、多くの地域の博物館において防災対策や連携が模索されている。多摩地域においても、同一地域の博物館が、防災について一緒に考えていく必要があるのではないかという考えから、2013年5月の総会で提案をおこない、実施については企画委員会で検討することになった。

2. 加盟館事前アンケートの実施(2013年8月～9月)

どのような形で実施するのが良いのだろうか、そして財源は。企画委員会の研修会班が検討を始めた。シンポジウムの実施そのものについても、三博協で意見が分かれると考えられたため、まず、2013年8月～9月にかけてシンポジウムの実施に関するアンケートを加盟館内で取った。その結果が下記のとおりである。

防災についての不安を抱えている館は多く、その関心は、防災マニュアルや、施設の老朽化というところ集まっていた。

この結果を踏まえて、2013年10月の協議会で報告し、防災に関するシンポジウムを実施する方向に動き始めた。ふだんの研修会より規模が大きかったため、助成金の申請も検討することにした。しかし、残念ながら助成金は申請できないことになってしまった。ちょうどこの頃、シンポジウムの計画を知った同じ多摩地域にある国文学研究資料館3研究グループより、ご協力を得られる話があり、開催を目指すことになった。

3. 全体に対する事前アンケートの実施(2014年7月～8月)

シンポジウムを実施するにあたっては、事前加盟館以外の館にもアンケートを取り、それらのデータをもとに話し合いを進

防災シンポジウムアンケート集計結果 (回収 22館・26件)

■博物館における防災に関して、現在、不安や疑問に思っていることはありますか。

- ・災害が発生した場合、少しでも被害を抑えるために収蔵品の保管方法に加えられる効果的な工夫について
- ・災害後の博物館資料の復旧について。博物館同士の連携や資料のレスキュー方法の具体的な手法もお聞きしたいです。
- ・野外であるため防災範囲が広く、お客様に目が行き届くかが一番の不安であります。又木造建造物が多い事から喫煙エリアを定めていますが、これ以外の火元に対する警戒を深め、(編集・固有名略)公園との隣接部分をどう注意していくかに不安を感じます。
- ・設立からの年数が浅いため、ノウハウの蓄積がなされていないこと。とくに、大学附属機関のため、学生、教員に対する対応方針はガイドラインがあるが、一般の来館者の方への対応については不安がある。
- ・火災や地震など漠然とした不安がある。
- ・災害発生時、資料館の資料や施設が被害を受けた際、復旧に必要な各種の手配や対応を速やかに行うためのノウハウが不足している点。
- ・収蔵資料(考古資料など)の地震対策
- ・東日本大震災等の教訓をふまえ、日常業務として実施すべき、平時の備えとしてどういった対策があるか。
- ・倉庫に寄贈品や昔の展示品・備品等が積みあがっており、地震発生時等による荷崩れの危険があり、人が居た場合大きな事故となる危険がある。防災に直接の関係は無いが、価値の無くなった寄贈品の処分方法が確立されていない事や、昔の展示品・備品の処分の手続きが煩雑で、なかなか整理できない。
- ・当館は築39年経っており、施設の老朽化が懸念されている。
- ・防災を考えた資料の収蔵方法
- ・展示室における防災(展示方法・展示台の免震など)
- ・災害時の的確な避難誘導
- ・築後40年を経て老朽化しており、耐震強度に不安がある。(耐震測定は10年前に一度行ったのみ)
- ・先日、同じ敷地内に建っていた史跡(編集・固有名略)が全焼する火災がありました。それをうけ、今年度防犯カメラと周囲に柵を取り付ける予定ですが、夜間は無人になり、周囲が生活道路のため、立ち入りを制限することができず、同様の火災が起こらないか不安です。
- ・(編集・固有名略)展示室は、築30年を経過し、やや老朽化の段階に入っており、さきの東日本大震災の際にも建物壁の連結部分に被害が見られたが、未だに修繕されておらず、耐震対策等に不安が残る状況である。
- ・考えられる災害について防災を心がけていますが、災害は想定外の場合が多く、不安に思っています。常に新しい資料(民具など)を受け入れているため、また展示も替えているため、状況が変化しているので防災に対する意識を持ち続け、情報を集めるように心がけてはいます。資料の保護のために作った防災グッズでも、地震などによってかえって資料を痛めてしまったり、防災グッズの素材が与える資料への影響などを心配しています。
- ・災害がおこったとき、収蔵庫が使えなくなった場合に資料を保存管理する一番よい方法は何か(他所への移動ではなく、現場でどのように応急処置したらよいか)

- ・地震に備えた展示方法の工夫(大掛かりな工事を必要としない、日常的な手法で)
- ・展示中の資料の保護の仕方
- ・実際、災害が発生した時に、入館者を安全かつ迅速に避難場所へ誘導させられることができるかどうか不安
- ・大掛かりな防災対策が行えない場合、資料に対して手軽に行える対策はないか。ホームレスなどが入館してきた際の対応方法。ボランティアも火や水を使用するため、防災意識をどう共有するか。
- ・当館の建物は耐震工事済みだが、大規模震災時には広域避難施設に指定されており、その際不特定多数の人々を受け入れなければならない、その対応に不安がある。
- ・災害時、他はどうしているのかわかる手段があると助かる。(運営→開館・閉館の判断等)
- ・防災マニュアルについて(適切なマニュアルの内容等)
- ・災害が起きた際の救援体制について(どこに連絡を入れればよいか等)
- ・火災も含む被災史料の適切な取扱い。
- ・資料リストをどのようにしておくべきか。
- ・主家に座敷・板の間を有し、園庭も広い。地震等の際の一次避難所の可能性はあるが、かまど・いろり以外は火気厳禁であり、議論は進んでいない。

■シンポジウムを開催する場合、どのようなテーマに関心がありますか。

- ・防災マニュアル・災害がおこった時の対処法…17
- ・被災資料の取り扱い方法…11
- ・近隣の博物館や研究機関などとの連携手法…11
- ・資料リストの共有…3
- ・東日本大震災等の事例…7
- ・多摩地域の災害可能性…9
- ・日常的な防災の備え…9
- ・その他→展示方法や応急処置に役立つ道具など、他館でどのようにしているのが実際にやくだった、効果があったなどの情報を知りたい。

■平成26年度にシンポジウムを開催する場合、参加しやすい時期や曜日

【月】10月(6)・11月(5)・12月(13)
 【曜日】月(3)・火(8)・水(12)・木(8)・金(7)・土(7)・日(2)・祝(0)

■その他、多摩地域の防災関連のシンポジウムを開催の際のご意見・ご希望

- ・多摩地域だけでなく近隣地区との連携をどう進めていくかを考え、今後の防災の取り組みとしたい。
- ・具体的で実践可能な内容で、各館が共有・協力できるような情報を得たいと思います。
- ・博物館関係団体だけでなく、多摩地区の博物館学講座を有する大学へも参加を呼び掛けてはどうか?
- ・指定管理の時の資料の救済手順などが知りたい。事例があれば知りたい。

めるという流れが良いと思われた。

2014年に入ってから、日程・会場の決定や、アンケートの内容・アンケート送付先のリスト化・シンポジウムの講師選定を同時並行的に進めていった。

2014年7月に防災シンポジウムに関する事前アンケートを、古民家も含めた多摩の博物館179館に一斉送付した。このうち11館は対象外であり、有効だった168館のうち102館より回収することができた。回収率は60%を超えた。



アンケート送付作業風景

4. 全体に対する事前アンケートの集計結果

本アンケートの集計結果は本誌14～17頁のとおりである。アンケートの項目は多岐にわたったが、以下のような傾向が見て取れた。

1) 全体的な館の傾向

③-1、市町村立の公立館が最も多く、④設立年代は、1980年代90年代が非常に多い。設立から20年以上となる1994年以前に設立された館は70館にのぼる。リニューアルした館もあるものの、多くの館が施設の老朽化という問題も抱えていることが推測できる。

(2) 館外資料の把握状況(4頁の3①)

館外資料の把握については、網羅的に把握していると答えた館は18%と少ない結果がでた。また、②にある災害時に館外資料の確認をする計画がある館も2割に満たない結果となった。

(3) マニュアルについて(5頁)

マニュアルを持っていると回答したのは57%。お客様案内のルートや方法がマニュアル化されている館が最も多く、被災文化財の初期対応などまでマニュアル化されている館は10館に留まっていた。

(4) 館の備えに関して(6頁)

被災資料や被災者に対応できる道具としては、AEDを備えている館が53館と多く、その他医薬品や備蓄飲食物など、被災者の救援に生かせるものを備えている館が多い。対照的に少ないのがフリーザーパックやフリーザー紙などの被災資料への対応用具で、「ある」と答えた館は若干数に留まった。

(5) 施設内の対策(6頁～7頁)

建物・展示室・収蔵庫いずれも特に対策なし、と答えた館が多い。7頁の⑩収蔵庫については、ロープによる転倒防止策のほか、ベルトやネットの使用、棚の固定などのコメントが見られ、収蔵庫の対策には工夫をしている館が多く見られた。

(6) 職員の研修(7頁の下)

防災に関する職員研修を「実施している」館は7割にのぼった。内容は来館者誘導と救急救命が最も多く、資料保全の研修をおこなっている館は4館だった。

(7) 外部との連携について(8頁)

「連携先は持っていない」と答えた館が59館と一番多く、次に多いのは、「博物館組織への加盟」という形をとっている館だった。連携先との資料情報の共有はおこなっていない館が85%と多く、「情報共有の必要性がある」と答えた館は34%にとどまった。これは共有可能な情報のコメントにもあるように、個人情報保護の課題があると見られていると推測される。

(8) 震災時の対応(9頁)

東日本大震災の翌日に開館した館は66%、7割近くにのぼるが、その後に、計画停電などで閉館した館があった。10日以上長期にわたって閉館する館も14館見られた。被害については(9-10頁)、施設の被害よりも、計画停電、交通機関の影響などが多く見られた。

(9) 震災時にあって良かったもの、なくて困ったもの(11頁の下の表)

ここでは、テレビ・ラジオ・電話・無線などの連絡通信手段が必要だったという回答が多かった。一方、もともと備えていた備蓄や地震対策のブックキーパー・転倒防止ロープが生きたという回答もあった。

(10) 自由意見欄(12頁)

最も多い声は、「防災マニュアルについて他館の事例を知りたい」というものだった。特に、人命優先の対応のなか、どのように「資料保全」の初期対応をおこなっていけばよいのか、という課題をあげる声があった。また、交通の不便な場所にある館については孤立化への不安、そして古い建物の老朽化などの課題も挙げられていた。

5. シンポジウムの内容決定とチラシ送付(～2014年9月)

アンケート送付と並行して、シンポジウムの内容の詰めもおこなわれた。三博協側の博物館同士の連携という課題意識に加え、国文学研究資料館3研究グループの民間所在資料の保全という課題が加わり、シンポジウムの内容は①現在の多摩地域が抱える災害リスクについての解説、②民間所在資料の保全についての講演、③多摩の学芸員たちも参加している栄村の資料保全活動の実例紹介、④防災について早い段階から博物館協会内での研修活動をおこなっている静岡県博物館協会の事例紹介、の4本および国文学研究資料館の青木睦氏をコーディネーターとした

パネルディスカッションということになった。

チラシも完成し、2014年9月にシンポジウムの案内を一斉送付した。申込み受付は、三博協会長館のパルテノン多摩が受付窓口となり、HP上の受付フォームとFAXで受け付けた。多摩の博物館関係者に多く参加していただき、情報交換をおこないたいという思いだったため、当初参加者を「多摩地域の博物館関係者」と記載したが、実際には多摩地域外からの参加の要望もあり、テーマは多摩地域であっても、当初から広い範囲での募集をおこなう必要があったと感じている。

6. シンポジウムの実施

全体のシンポジウムの内容・プログラムは以下のとおりである。

【開催日】平成26(2014)年10月30日(木)

【時間】13:00-17:00

【会場】国文学研究資料館大会議室

【スケジュール】

- 13:00 開会のことば／伊東順一(公益財団法人多摩市文化振興財団事業課長※2014年度三博協会長館パルテノン多摩)
趣旨説明／青海伸一(福生市郷土資料室／三博協会企画委員長)
司会／太田尚宏(国文学研究資料館准教授)
- 13:10 講演①「多摩地域の地震と地盤災害—立川断層帯と首都直下地震の最新情報—」
：鈴木毅彦(首都大学東京都市環境学部地理環境コース教授)
- 13:40 講演②「民間所在資料の保全、過去・現在・未来」
：西村慎太郎(国文学研究資料館准教授)
- 14:10 講演③「多摩の学芸員が関わっている文化財レスキュー—栄村における地域史料保全有志の会の事例から—」
：高橋健樹(武蔵村山市立歴史民俗資料館学芸員)・安齋順子(くにたち郷土文化館学芸員)
- 14:40 講演④「静岡県博物館協会の防災への取組」
：新田建史(静岡県博物館協会事務局員)
- 15:10 休憩(15分程度)※質問用紙を回収。
- 15:25 パネルディスカッション
：コーディネーター 青木睦(国文学研究資料館准

教授)

17:00 終了

当日は、83名の参加者を得た。

講演①では、鈴木毅彦氏から日本列島・関東の地盤の成り立ちと、火山や地震の起こるメカニズムの解説があった。また、多摩地域周辺におこると想定される地震についても、東日本大震災を受けて、首都圏直下型地震の再検証のほか、海溝型地震と活断層で発生する地震などのリスクが想定されることなどの説明があった。加えて、立川断層については完新世の活動可能性も出てきていることなどが紹介された。さらに、災害は地震だけにとどまるものではなく、火山の噴火などさまざまなリスクがあることが指摘され、多摩地域における災害リスクを地震以外にも広げて考える必要性が示された。

講演②では、西村慎太郎氏から民間所在資料の保全の歴史的経緯の説明があり、郷土史家が史料保全に果たした役割などが紹介された。さらに、資料散逸リスクは災害だけではなく引越や代替わりなどにもあることが指摘されるとともに、移動する歴史遺産の事例が紹介された。こうした現状のもとでは、資料保全のためには自治体を超え、所蔵者・大学・研究機関・NPO・ボランティアなど、広い範囲の連携が必要であることが提唱された。

講演③では、安齋順子氏(くにたち郷土文化館)と高橋健樹氏(武蔵村山市立歴史民俗資料館)から、東日本大震災直後に発生した長野県北部地震で多大な被害を受けた長野県栄村における地元とともに継続する栄村の地域史料保全活動の経緯の説明があった。すでに「レスキュー」の段階は過ぎ、展示や調査活動、体験学習会、現地報告会が実施されるなど、「活用」の時期に入っていることの報告があった。また、栄村の自然や文化を満喫し、地域の方々との交流を通じて、楽しみながら作業を継続しているようすが示された。

講演④では、新田建史氏(静岡県博物館協会)より、10年にわたって継続してきた静岡県博物館協会の活動紹介があった。自己チェックシートや、講習会の開催、被災館園調査、地域の人も参加した「文化財ウォーク」などの事例が紹介された。防災事業には、「形となって残る」「経験や刺激を残す」といったものがあるが、これらを状況に応じて加盟館との連携、非加盟館との連携など範囲を変えて連携していく可能性も指摘された。また、長く継続するためのモチベーションの低下等も鑑み、肩ひじ張ら



講演風景



パネルディスカッション風景

ずに、楽しみながら続けていく必要性が述べられた。

以上の4つの講演では、全体を通じて、災害だけではなく“人々の無関心”などもリスクであることが指摘された。最終的には、関心を高める活動、すなわち博物館の日常業務の延長こそが災害時の文化財保存への下地になることが示唆されたと思われる。

講演後は青木睦氏(国文学研究資料館)をコーディネーターとしてパネルディスカッションを実施した。

事前アンケートの報告のほか、会場参加者から現状を紹介する報告や、他県のネットワーク事例の紹介などがあつた。

連携においては、形だけの「ネット」ではなく、「ワーク」(活動)を伴う実践的なものが必要という指摘が西村氏から、「助けられ上手になる」という姿勢が新田氏から出された。また、鈴木氏から「危機意識が薄くなりつつあるこの時期のタイミングでシンポジウムを実施したことには大きな意味がある」との指摘がなされ、盛況の内に終了した。

7. 参加者の反応

参加者へのアンケートでは、「連携していくことの必要性を感じた」「静岡県の話をうかがうことができ、大変有意義だった」「静岡県博協のチェックシートが参考になった」「時宜を得た企画」「共通的な技術を学べる場につながれば」などの肯定的な声があつた一方、「全体の締りが薄い」「もう少し多摩地域の博物館等に関する話を聞きたかった」など、シンポの内容や構成面での課題を指摘する声もあつた。

8. 今後に向けて

本シンポジウムは、多摩地域で初めて、防災をテーマとして、博物館同士が集まる機会を設けた点で意義があつたと思われる。しかし、講演で扱った内容は、古文書や民具など歴史民俗系資料が多く、また、平日におこなったこともあり、参加館には偏りが見られた。

また、全体の講演で示唆されていたように、防災の取り組みは長期的スパンで続けていくことが重要である。平成27年2月には実践的な資料の取り扱いのワークショップを実施する予定になっている。今回のシンポジウムを契機に、今後もこうした取り組みを継続して続けていきたい。

なお、シンポジウム開催にあたっては、講師を引き受けてくださった皆様、参加してくださった皆様、そして、国文学研究資料館3研究グループの先生方にご大変お世話になった。記して謝意を申し上げるものである。また、実施に向けて力を合わせてくださった関係者のみなさまに御礼申し上げたい。

【国文学研究資料館3研究グループ】

①基幹研究「民間アーカイブズの保存活用システム構築に関する基礎研究」(代表・大友一雄氏)

②人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」のうち「大震災後における文書資料の保全と活用に関する研究」(代表・西村慎太郎氏)

③同「東日本大震災における被災紙資料の保存と活用に関するソリューション研究」(代表・青木睦氏)

※なお、国文学研究資料館・太田尚弘氏には企画立案から実務面まで多大なるご協力を賜った。

【会長館・役員館】

2013年度

会長館／東大和市立郷土博物館(後藤祥夫氏・濱田恵美氏)

役員館／武蔵村山市立歴史民俗資料館・くにたち郷土文化館・福生市郷土資料室・あきる野市五日市郷土館・パルテノン多摩歴史ミュージアム

2014年度

会長館／パルテノン多摩歴史ミュージアム(伊東順一氏・乾賢太郎氏・仙仁径氏)

役員館／あきる野市五日市郷土館・東大和市立郷土博物館・武蔵村山市立歴史民俗資料館・立川市歴史民俗資料館・多摩六都科学館

【企画委員】

2013年度委員長／高橋英久氏(江戸東京たてもの園)

2014年度委員長／青海伸一氏(福生市郷土資料室)

2013・2014年度企画委員／(五十音順)

金井安子氏(調布市郷土博物館)

川崎渚氏(羽村市郷土博物館)

河村康博氏(羽村市郷土博物館)

菊池義輝氏(くにたち郷土文化館)

小林加奈氏(首都大学東京91年館)

齋藤有里加氏(くにたち郷土文化館／農工大学附属科学博物館)

仙仁径氏(パルテノン多摩歴史ミュージアム)

土居由布子氏(清瀬市郷土博物館)

橋場万里子(パルテノン多摩歴史ミュージアム)

花木知子(府中郷土の森博物館)

森悦子氏(調布市郷土博物館)

柳澤剛氏(清瀬市郷土博物館)

東京都三多摩公立博物館協議会
国文学研究資料館研究グループ
シンポジウムアンケート

多摩地域の博物館・資料館・美術館等の資料の保全・防災体制等に関するアンケート

1. 館の属性について

①館名	②所在地	東京都	市・町・村
③設置主体	<input type="checkbox"/> 公立(国・都・府・市・町) <input type="checkbox"/> 公立(国・都・府・市・町) <input type="checkbox"/> 公立(私立) <input type="checkbox"/> 私立 <input type="checkbox"/> 企業 <input type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 財団(一般) <input type="checkbox"/> 財団(公益) <input type="checkbox"/> NPO <input type="checkbox"/> その他()	④設立年 ⑤所収蔵 ⑥1万人未満 <input type="checkbox"/> 1万人以上10万人未満 <input type="checkbox"/> 10万人以上 ⑦職員数 ⑧うち学芸員(人)	
⑦館の分野	<input type="checkbox"/> 総合博物館 <input type="checkbox"/> 歴史博物館 <input type="checkbox"/> 美術館 <input type="checkbox"/> 科学館 <input type="checkbox"/> 自然史博物館 <input type="checkbox"/> 動物園 <input type="checkbox"/> 植物園 <input type="checkbox"/> 古民家 <input type="checkbox"/> 公文書館 <input type="checkbox"/> その他()		
⑧取扱い資料分野	<input type="checkbox"/> 考古資料 <input type="checkbox"/> 歴史資料 <input type="checkbox"/> 民俗資料 <input type="checkbox"/> 行政文書 <input type="checkbox"/> 美術資料 <input type="checkbox"/> 自然史資料 <input type="checkbox"/> 理工系資料 <input type="checkbox"/> 写真資料 <input type="checkbox"/> 映像・音声資料 <input type="checkbox"/> 建造物 <input type="checkbox"/> 動植物(飼育・生体展示) <input type="checkbox"/> その他()		

2. 館内の資料の保存および管理について

①資料の保存・保管方法	<input type="checkbox"/> 紙質系 <input type="checkbox"/> 箱内のみ <input type="checkbox"/> 箱外保管者 <input type="checkbox"/> 箱内のみ <input type="checkbox"/> 箱外保管者	<input type="checkbox"/> デジタル <input type="checkbox"/> 具体的に
②実施している資料管理法	<input type="checkbox"/> 保存方法についてのマニュアル化 <input type="checkbox"/> 保存施設の温度湿度管理 <input type="checkbox"/> 収容・積層 <input type="checkbox"/> IPM <input type="checkbox"/> 詳細目録(あるいは目録)の作成 <input type="checkbox"/> マイクロフィルムやデジタル画像での記録 <input type="checkbox"/> その他()	

3. 館外の所有者が(所有者の平元で)保管している資料の把握と災害時の対応について

①館外資料の把握状況	<input type="checkbox"/> 継続的に把握できている(所在リストがある) <input type="checkbox"/> 展示や調査で把握したところのみ把握(所在リスト有り/無し) <input type="checkbox"/> 一部の資料に限り情報を把握 <input type="checkbox"/> ほとんど把握していない	<input type="checkbox"/> 具体的に
②災害時に館外資料の状況確認の計画	<input type="checkbox"/> ある <input type="checkbox"/> 一部ある <input type="checkbox"/> 他の部署にある <input type="checkbox"/> 全くない <input type="checkbox"/> その他()	

4. 館の防災体制について

博物館の防災体制	①マニュアルの有無	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 ②内容 <input type="checkbox"/> 災害が起きた際のお客様案内のルートや方法 <input type="checkbox"/> 被災文化財の初期対応 <input type="checkbox"/> 地域住民の受け入れ対応方法 <input type="checkbox"/> 関係・関係の判断基準 <input type="checkbox"/> その他()
	③防災組織・体制の明文化	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無
	④防災関連の予算措置	<input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無
	⑤防災設備の有無	<input type="checkbox"/> 出入口や窓の侵入防止装置 <input type="checkbox"/> 防犯監視システム <input type="checkbox"/> 火災警報システム <input type="checkbox"/> 消火設備 <input type="checkbox"/> 収容室 <input type="checkbox"/> 展示室 <input type="checkbox"/> 事務室 <input type="checkbox"/> その他(場所:) <input type="checkbox"/> その他(機材:) <input type="checkbox"/> その他()
場所別対策	⑥展示室・収容室に備わっている機器・用具	<input type="checkbox"/> 資料用 <input type="checkbox"/> 真空凍結乾燥機 <input type="checkbox"/> フリーザーバック <input type="checkbox"/> フリーザーボックス <input type="checkbox"/> 除湿機 <input type="checkbox"/> デント <input type="checkbox"/> 被災者用 <input type="checkbox"/> 毛布 <input type="checkbox"/> 防寒 <input type="checkbox"/> 救急用医薬品 <input type="checkbox"/> AED <input type="checkbox"/> 備蓄食料 <input type="checkbox"/> その他()
	⑦災害時の資料収容地	<input type="checkbox"/> 有(具体的に:) <input type="checkbox"/> 無
	⑧建造物の対策	<input type="checkbox"/> 免震構造 <input type="checkbox"/> 耐震化 <input type="checkbox"/> その他() <input type="checkbox"/> 特に無し
人員	⑨展示室の対策	<input type="checkbox"/> 免震台 <input type="checkbox"/> 落下防止具 <input type="checkbox"/> 震動防止フィルム <input type="checkbox"/> その他() <input type="checkbox"/> 特に無し
	⑩収容庫の対策	<input type="checkbox"/> 免震構造 <input type="checkbox"/> 免震台 <input type="checkbox"/> 収容庫からの転落防止策(ロープ <input type="checkbox"/> 転倒防止用伸縮棒 <input type="checkbox"/> その他()) <input type="checkbox"/> 特に無し
	⑪防災に関する職員研修	<input type="checkbox"/> 実施している() <input type="checkbox"/> 実施していない
⑫外部との連携	⑫防災スキル保持者	<input type="checkbox"/> 有() <input type="checkbox"/> 無
	⑬博物館結成などの大きな団体に加盟	<input type="checkbox"/> 防災協定を結んだ団体がある <input type="checkbox"/> 協定は結んでいないが連携しやすい組織・団体がある <input type="checkbox"/> ボランティアや地域住民による災害時の支援体制がある <input type="checkbox"/> 特に連携先は持っていない <input type="checkbox"/> その他()
⑭連携先との資料情報共有の現状と必要性	<input type="checkbox"/> 有() <input type="checkbox"/> 無()	
⑮連携先との資料情報共有の範囲	<input type="checkbox"/> 館蔵資料の情報共有 <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無() <input type="checkbox"/> 地域所在資料の情報共有 <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無() <input type="checkbox"/> 資料の名称 <input type="checkbox"/> 資料の種類 <input type="checkbox"/> 資料の数量 <input type="checkbox"/> 資料由来の経緯 <input type="checkbox"/> 所蔵者の氏名 <input type="checkbox"/> 所蔵者の住所 <input type="checkbox"/> 所蔵者の電話番号 <input type="checkbox"/> その他()	

※表裏に続く

東京都三多摩公立博物館協議会
国文学研究資料館研究グループ
シンポジウムアンケート

多摩地域の博物館・資料館・美術館等の資料の保全・防災体制等に関するアンケート

【任意回答】

5. 東日本大震災発生後の対応について

①定日の対応	<input type="checkbox"/> 開催した() <input type="checkbox"/> 開催した() (期間)	<input type="checkbox"/> 確定
②震災による影響	<input type="checkbox"/> 収蔵資料の被害 <input type="checkbox"/> 館内機物の剥離・落下 <input type="checkbox"/> 什器の転倒 <input type="checkbox"/> 入館被害 <input type="checkbox"/> 停電(計画停電以外) <input type="checkbox"/> 停電(計画停電によるもの) <input type="checkbox"/> 電話の不通 <input type="checkbox"/> エレベーターの停止 <input type="checkbox"/> 降電磁界(気象庁・ボランティア・職員) <input type="checkbox"/> 降電磁界の受け入れ <input type="checkbox"/> 事業・展示の中止や大幅な変更 <input type="checkbox"/> その他()	
③連絡手段で有効だったもの	<input type="checkbox"/> 固定電話 <input type="checkbox"/> 携帯電話 <input type="checkbox"/> PHS <input type="checkbox"/> FAX <input type="checkbox"/> 無線 <input type="checkbox"/> e-mail <input type="checkbox"/> Twitter <input type="checkbox"/> Facebook <input type="checkbox"/> HPの掲示板 <input type="checkbox"/> その他()	
④震災後の文化財(含自然資料・建造物)の被災状況	<input type="checkbox"/> 登録・指定文化財についてのみ、おこなった(実施主体: <input type="checkbox"/> 博物館 <input type="checkbox"/> 他部署) <input type="checkbox"/> 登録・指定文化財に加え、それ以外の民間所在の資料についてもおこなった(実施主体: <input type="checkbox"/> 博物館 <input type="checkbox"/> 他部署) <input type="checkbox"/> おこななかった <input type="checkbox"/> その他()	
⑤被災状況	<input type="checkbox"/> あって良かったもの <input type="checkbox"/> なかったもの	<input type="checkbox"/> 無くもなかったもの

6. 自由意見

その他、防災等に関することで課題と感じていること、必要だと思うこと、現在取り組みをおこなっていること、その他ご意見などがありましたら、ご自由にお書きください。

回答シートの掲載可否についてお答えください。

◆個別の回答シート(本シート)をコピーして配布することについて 可 / 不可

ご協力にありがとうございます。

①このアンケート掲載は防災のための啓発等の情報共有を目的としています。
 ②掲載された情報は、原則として統計処理を行い、個別データの特定をしない形で利用いたします。
 ③掲載しない情報は、原則として掲載しないものについては、個別の印刷部数がない、非公開アンケート回答者と共有します。
 ④アンケート回答には、統計後のデータおよび、公開許可をいただいた個別データもまた共有いたします。

東京都三多摩公立博物館協議会・国文学研究資料館研究グループ
シンポジウム

多摩地域の博物館・資料館・美術館における防災と地域連携

平成23年(2011)に東日本大震災が起こって以降、各地の博物館・資料館・美術館(以下、「博物館等」と略す)において防災に向けた取り組みが始まっています。災害時に博物館等が収蔵品や地域の文化財を守る役割を果たすためには、平時から、「資料のリスト化」「防災マニュアルの策定」「基礎的な知識の獲得」「ネットワークの構築」などに取り組んでおくことが重要です。多摩地域には多くの博物館等があります。立川断層をはじめとするリスクを抱えた多摩地域において、さまざまな収蔵品をかかえる博物館等が互いの情報を知り、収蔵品や、地域の文化財を守るため知恵を出し合う場を設けることは、極めて重要なことではないでしょうか。そこで、本シンポジウムを開催し、博物館相互の情報共有をおこなうことで、災害・防災への知識を深め、各関係者が連携していくためのきっかけ作りをおこないたいと思います。

《日時》平成26年10月30日(木) 13時～17時
 《会場》国文学研究資料館大会議室(立川市緑町10-3) 《参加費》無料
 《定員》120名 《対象》多摩地域や博物館等にかかわる方(個人・行政・大学関係者含む)

「多摩地域の地震と地盤災害—立川断層帯と首都圏下地盤の最新情報—」
鈴木毅彦氏(首都大学東京都市環境学際連携講座教授)

「民間所在資料の保全、過去・現在・未来」
西村慎太郎氏(国文学研究資料館教授)

「多摩の学芸員が関わっている文化財レスキュー—栗村における地域史料保存有志の会の事例から—」
高橋健樹氏(武蔵村山市立歴史民俗資料館学芸員)、安齋順子氏(たちばな文化館学芸員)

「静岡県博物館協会の防災への取組」
新田建史氏(静岡県博物館協会事務局長)

パネルディスカッション コーディネーター 青木健氏(国文学研究資料館教授)

お申込み方法 9月13日(土)10:00より申し込み受付開始(先着順)。
 【お申込み】①メール、②FAX、③申込フォームに必要事項(ご所属・氏名・お電話番号)をご記入の上お申し込みください。
 ①メール museum@parthenon.or.jp ②FAX 042-376-9191(公益財団法人多摩公立博物館協議会代表 FAX)
 ③申込フォーム 東京都三多摩公立博物館協議会ホームページ(http://homohoku.jp)からお申し込みください。
 【発表・問合せ先】公益財団法人多摩市文化振興財団(平成26年度東京都三多摩公立博物館協議会 会長兼) 宇賀原直
 TEL 042-375-1414 (代) FAX 042-376-9191 (代) e-mail museum@parthenon.or.jp

主催：東京都三多摩公立博物館協議会・国文学研究資料館研究グループ(※)
 (※)国文学研究資料館「国文学研究資料館研究グループ」(代表：丸尾一樹)、立川断層帯と首都圏下地盤の最新情報「大規模震災と大規模地盤災害」(代表：丸尾一樹)、「民間所在資料の保全、過去・現在・未来」(代表：丸尾一樹)、「民間所在資料の保全、過去・現在・未来」(代表：丸尾一樹)。

アンケート結果について

アンケート実施時期：平成26年7月15日～8月15日
 アンケート送付館：多摩地域の168館(当初発送179館のうち未到着&対象外施設誤送付分11館)
 回答数：102館(回収率 60.7%) 集計：三博協企画委員会研修会

1. 館の属性について

①館名…省略
 ②所在地

③-1 設置主体

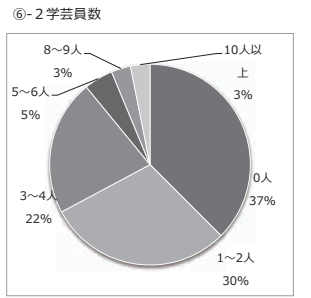
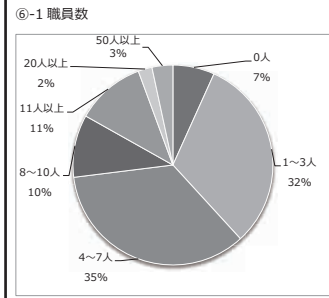
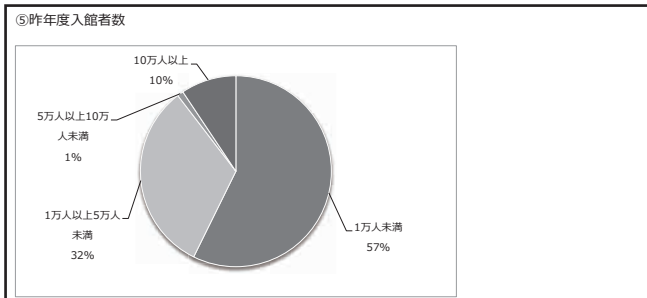
③-2 直営・非直営

※「その他」の設置主体：国立大学法人、大学共同利用機関法人、一部事務組合、独立行政法人、宗教法人、協同組合

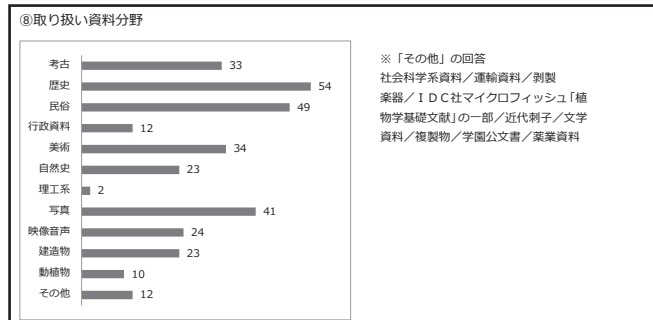
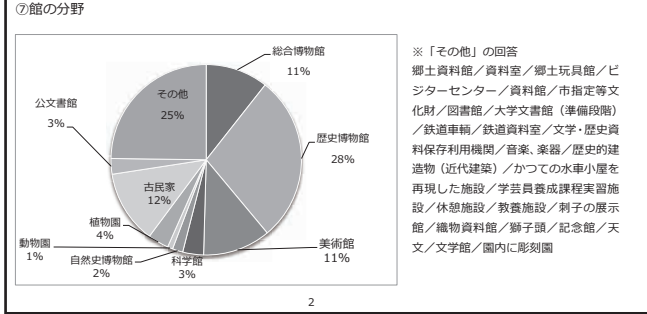
※「非直営」の内容：指定管理者、運営委託、運営市民協議会、公園管理者に管理委託 など

④設立年代

※なお、設立から20年以上となる1994年以前に設立された館数は70館にのぼる(ただし、改築の有無を問わず)



※無人・業務の古民家なども「0人」でカウントしている。本欄は無回答の館も多かった。



2. 館内の資料の保管および管理について

①資料台帳保管方法

デジタル	61
紙台帳	75

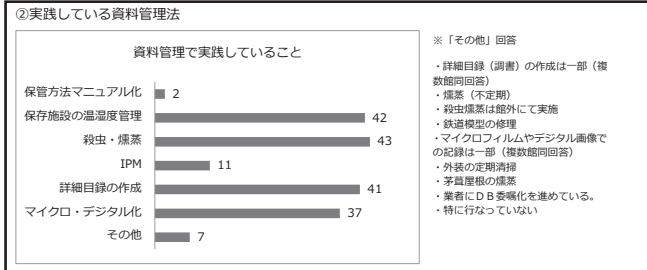
台帳の保管場所

デジタル	51	8
紙台帳	59	15

デジタル保存メディア

HDD	80%
ディスク	13%
クラウド	7%

※具体的な内容の回答(一部の重複回答は除外した。特定の館名・自治体名は削除した)
 ・紙台帳記入は2012年で中止。デジタルデータはホストコンピュータで管理。
 ・平成25年度に一部台帳整理を実施し、紙とデータベースの台帳を作成した。今後も実施し台帳を整理していく。
 ・資料録録とデータベースを併用している。
 ・目録化したデータベースをPC及びM O等で管理
 ・紙台帳はデジタルデータベースをプリントしたもの。デジタルデータは所管課に保管されているが、随時更新はしていない。
 ・資料分野毎に異なる台帳管理方法を採用。デジタルについては、一部バックアップもHDDに保管。
 ・併用、ベースは紙で、変更情報はエクセルで管理。
 ・部分的にDBのデジタル化に取り組んでいる。
 ・収集資料を紙の台帳管理からデータベースによる管理へ移行中。移行後も両者併用の予定。
 ・紙の資料目録及び収集書籍のカード及びこれらのデジタルデータ
 ・紙台帳、デジタルデータとも、資料室内でバックアップ
 ・デジタルは一部のみ
 ・バックアップは本館にて保管
 ・各担当により異なるがファイルとデジタルデータにより管理
 ・紙台帳を元にしたデジタル化の作業中
 ・指定管理者の契約の際に、資料目録を設置者と共有している。DBは館内でバックアップ。
 ・契約時に紙の資料目録を設置者と取り交わしている。
 ・リニューアルにもともない、整理中
 ・作品画像などDVDにて保管
 ・I.B.Museumにて管理 ・I.B.MUSEUM SaaS
 ・デジタルはクラウド
 ・数があまり多くないので、台帳は作成していません。
 ・民具は館外(閉鎖小学校)に保管。
 ・詳細目録(調書)の作成は一部
 ・パスポートデータ、植栽樹木台帳 園内の植物の写真等をパソコン ハードディスクに保管”



3. 館外の所有者が(所有者の手元で)保管している資料の把握と災害時の対応について

①館外資料の把握状況

ほとんど把握せず	33%
把握	18%
関係したところのみ	23%
一部の資料に限る	26%

※具体的な内容
 ・館外資料はない。(複数館同回答)
 ・館外資料を把握する施設に当てはまらない。(複数館同回答)
 ・市民が所有している資料等を展示のために借用した場合は、借用の記録が残るので、ある程度は把握できる。ただし、情報更新は行っていない。
 ・市が指定した文化財に関して台帳化して把握。
 ・指定文化財を中心に把握。
 ・美術作品の一部を外部倉庫で保管
 ・地域史料書として、諸家文書の目録が発行されている。
 ・大学中の各研究室が持っている資料について、一部把握している(コンピュータコレクション)
 ・展示関係教員の研究室で管理され、今後の利用価値が高いと考えられる資料を優先して目録化を進めている。
 ・関係者に関する外部資料を一部把握
 ・史料所在情報データベースを公開
 ・展示等で把握した資料はあるが、リスト化はしていない。
 ・災害時には、個別に確認(一部、実地検分)。
 ・図録とファイリングの資料があるものもある。
 ・展示や調査を行った資料は画像も含めデータ化されている。
 ・市史観さん時に調査を実施している資料についてはリストがある。

②災害時に館外資料の状況確認する計画

全くない	81%
一部ある	13%
ある	3%
その他	3%

※「その他」の具体的な内容
 ・館外に資料なし
 ・計画は無いが道義的に確認を行う

4. 館の防災体制について

①マニュアルの有無

無	43%
有	57%

マニュアル内容

お客様案内のルートや方法	47
被災文化財の初期対応	10
地域住民の受け入れ対応方法	6
開館・閉館の判断基準	11
その他	15

※「その他」の具体的な内容
 (防災マニュアルは大学や施設全体のものがあり、館や展示室独自のマニュアルがないとする館が複数あり)
 ・作成中 ・マニュアル作成予定
 ・自衛消防隊による初期消火(複数館同回答)
 ・初期消火、緊急放送、他
 ・初期消火等防災マニュアル
 ・消火器訓練 ・任務分担

②防災組織体制の明文化

無	34%
有	66%

②防災関連の予算措置

無	66%
有	34%

③防災用設備

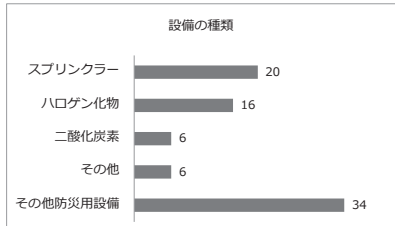
侵入防止策	45
防犯警備システム	75
火災警報システム	85
消火設備あり	80

消火設備の場所

収蔵庫	38
展示室	47
事務室	39
その他	30

※消火設備の場所
 ラウンジ、建物内、駐車場、学芸員室など左記以外の館内各所、廊下、作業室・保管庫、古民家本体、廊下、事務室、会議室等、水車小屋、展示回廊、プラネタリウムドーム、エントランスロビー、バックヤード、ホール、屋外(建物周囲)、屋外(公園内)、倉庫、音楽室

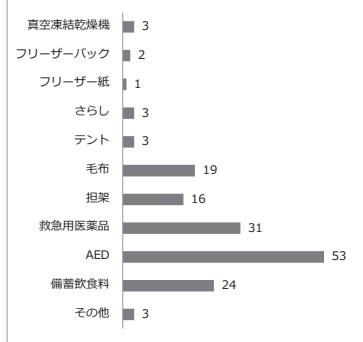
設備の種類



※その他・その他防災用設備の内容
 ・スプリンクラーは収蔵庫以外、二酸化炭素は収蔵庫
 ・ドレンシャ
 ・スプリンクラーは館内にはなし。
 駐車場のみ
 ・チッ素
 ・粉末
 ・消火器 (多数回答)
 ・粉末消火器
 ・消火栓 (多数回答)
 ・レインクロー
 ・煙感知器
 ・警備員による巡回を実施
 ・収蔵庫以外は消火器・屋外消火栓で対応
 ・放水銃

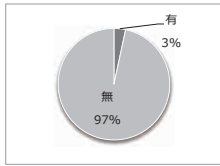
※「その他」と「その他防災用設備」についての回答は内容が重複したため記入された内容を一本化した。

⑥ 被災資料や被災者に対応できる道具など



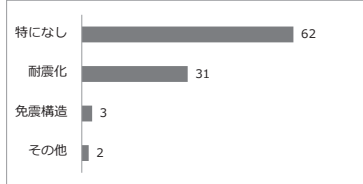
※その他内容
 ・かまどなど
 ・簡易トイレ、アルミ寝袋
 ・備蓄飲食物は館で対応
 ・自館にはないが、借用可
 ・非常用トイレ

⑦ 災害時の資料置き場



※置き場の具体的内容
 ・倉庫
 ・特に決まっていない

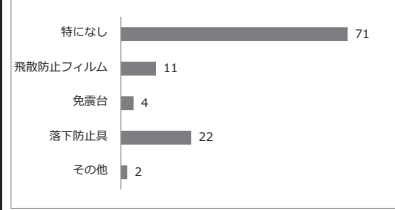
⑧ 建物対策



※その他
 ・H6竣工建物
 ・耐震性は確認されている

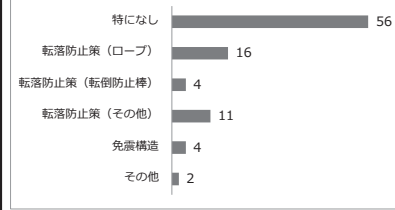
6

⑨ 展示室対策



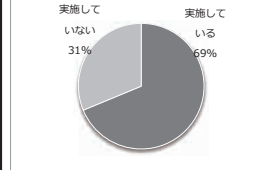
※その他
 ・転倒防止のテグスなど
 ・転倒防止

⑩ 収蔵庫対策

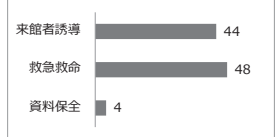


※その他
 ・ビニールテープ
 ・ロープの一部
 ・収蔵庫なし (複数館同回答)
 ・棚と壁も金属固定
 ・落下防止ベルト
 ・一部に網戸
 ・耐震
 ・ベルト
 ・対策棚
 ・ネットによる飛散防止
 ・棚の設置
 ・耐震金具等により補強
 ・棚固定

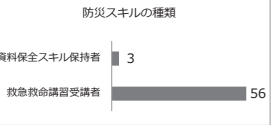
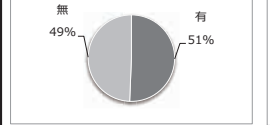
⑪ 防災に関する職員研修



職員研修内容



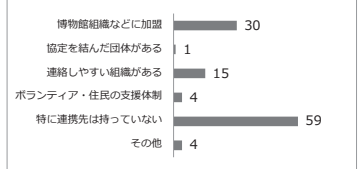
⑫ 防災スキル保持者



※その他
 防火管理者、防災に関する職員研修はAED研修を予定
 消火活動の研修を実施

7

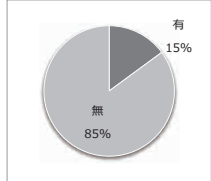
⑬ 外部との連携



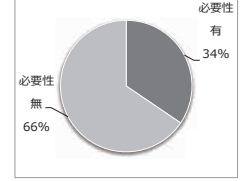
連携団体名
 ICOM
 日本博物館協会 (多数)
 東京都博物館協議会 (多数)
 東京都三多摩公立博物館協議会 (多数)
 全国歴史民俗系博物館協議会 (多数)
 全国美術館会議 (複数)
 全国科学博物館協議会 (複数)
 大学博物館等協議会 (複数)
 全国大学博物館協定協議会 (複数)
 全国文学館協議会
 社団法人日本植物園協会
 日本動物園水族館協会
 多摩ミュージアムネットワーク研究会
 社団法人NET
 観光協会
 本社・支店
 自治会、自治体・教育委員会
 警察、消防署
 連絡網、複合ビル防災センター、

連携先との資料情報の共有

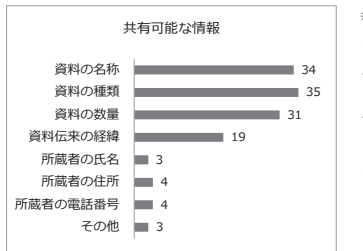
⑬-1 連携先との資料情報共有の現状



⑬-2 連携先との資料情報共有の必要性



⑬ 共有可能な情報

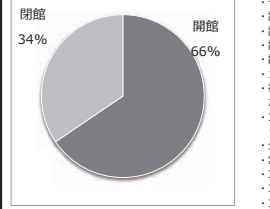


※情報共有の範囲等へのコメント
 ・情報を整理した上で共有が必要
 ・個人情報保護、情報自体を外部へ持ち出すことへの対策
 ・教育委員会とは資料情報をおおよそ共有している
 ・共有方法の手段を構築した後に、個人情報保護と情報の更新について調整が必要
 ・必要については今後検討したい
 ・絶滅危惧種等、特定の分類群
 ・個人情報の保護が必要。現状では難しい
 ・個人情報が含まれないことが条件、館蔵の場合は所在地・電話番号
 ・該当資料無し
 ・検討結果次第で決定したい

8

5. 東日本大震災発生時の対応について

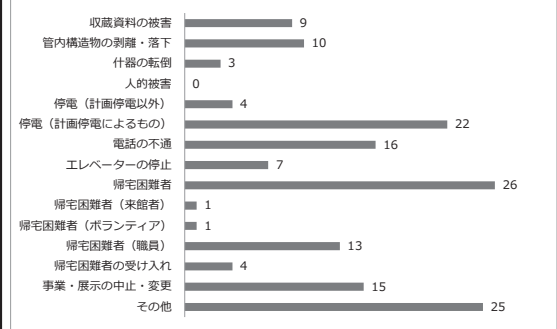
⑭ 翌日の対応



※閉館日数
 1日閉：4館
 2~3日閉：4館
 7日~10日閉：5館
 11日閉~20日閉：9館
 21日閉~30日閉：2館
 31日~約50日閉：3館

※補足
 ・一部市民ギャラリーのみ18時まで開館
 ・計画停電実施予定の時間帯は休館
 ・計画停電ははじめてから休館
 ・計画停電により、後日休館しました。
 ・計画停電により3/17および3/18の午後休館
 ・14日~30日の間、計画停電のため一時的に閉館した時間あり。
 ・被害があった建物は閉館した。また節電協力のため3/17-31閉館した。
 ・3月14日~30日まで、計画停電の対応のため閉館する時間帯あり
 ・公開にかなり電気を使うため、約1か月間閉館
 ・常設展示室のみ開館
 ・3/14午後から3/31までの12日間臨時休館
 ・3/15午後より4/6まで休館
 ・3/11以後の平日のみ休館
 ・発生次の日すべてを調査、被災なし
 ・もともと3月は閉館期間で、平常時は週1回のみ閉館していますが、4月前半の閉館 (予定) 日を2日間閉しました。
 ・3/11 15:00閉室、3/12・13短縮開室 (10:00-16:00)、3/14-24閉館、3/25-31短縮開室 (10:00-17:00)
 閉館日数に展示替え期間を含む
 ・翌日及びその翌日は閉館したが、3月14日~3月31日までは震災後点検のため休館とした。
 ・もともとの休館日を含む
 ・閉館が周知されたのは翌週から
 ・本園に被害はなく、安全が確認できたため
 ・GWから閉館
 ・まだ博物館が開館していなかった。
 ・3/12-3/31
 ・3月1日から4月17日まで電気設備更新工事のため休館。再開館は当初の予定通り。
 ・翌日が土曜日であり、3月中の土曜日は休館
 ・当日は通常より2時間早く閉館。3月まで夜間閉館中止。

⑮ 震災による影響



9

※震災による影響「その他」コメント

- ・特になし (多数)
- ・計画停電以外の影響なし
- ・計画停電区域となったため開館時間を随時短縮した
- ・実際の停電はなかったが、計画停電の計画が出されたことにより開室・WSに影響があった
- ・計画停電等に交通機関が影響を受け、その結果来館者が減少
- ・節電要請による開館時間の短縮
- ・節電のため3月中は公開展示室を開室
- ・車のガソリンの入手難も関係した自主休館の取得、通勤時間の大幅な増加。
- ・直後より青梅線 (JR) が不通となり、3/16以降徐々に復旧するまで公共の交通手段がなくなった。
- ・なし (施設・収蔵品には被害・影響はありませんでしたが、交通不通のため来館者なし)
- ・収蔵資料の被害は少
- ・展示品の転倒が少しあったが、ほとんど影響なし
- ・余震が続くため展示作品の一部入替を行った。
- ・温室のライト1台落下のみ、それ以外の被害はない。
- ・展示物の落下・真空管の破損 11コ
- ・保管していたガラス板が割れた
- ・開架図書の一部落下
- ・配架図書の落下、天井の剥離・落下
- ・館外壁の亀裂、落下 (小片)
- ・建物の天井、壁、床に亀裂が入った。パンフレット架等が数メートル移動
- ・ガラスのひび割れ
- ・アスファルトひび割れ
- ・講演会の中止
- ・翌日開催予定のイベント中止
- ・基礎ゼミという新入生受け入れ行事を中止しました。大学他部署は実施。

③連絡手段で有効だったもの

役に立った通信手段

固定電話	39
公衆電話	10
携帯電話	15
PHS	3
FAX	2
無線	4
e-mail	18
Twitter	1
Facebook	2
HPの掲示板	4
その他	6

※その他

- ・ブログ
- ・特になし
- ・人が常駐していないので不明
- ・連絡カード/携帯電話は落ち載ってから使用した
- ・HPでの告知
- ・HP 掲示板は翌日以降の開館時間の変更や講演会の中止情報の掲示

10

④震災後の文化財 (含自然資料・建造物) の被災状況調査

※その他

- ・特に被害なし
- ・影響がなかった
- ・市内にそれほど被害が発生していなかったから
- ・所蔵資料全体に実施
- ・展示作品のみ調査
- ・館内貴重資料の調査は行なった。
- ・ただし、館蔵のもののみ
- ・文化財を所蔵しておりません。
- ・社会教育課
- ・園内を一週り巡回し、異常のないことを確かめた。
- ・登録指定文化財は博物館と他部署が実施、それ以外の民間所在資料は他部署が実施
- ・都指定天然記念物が、大きく揺れ周辺の柵が壊れ地割れが起きた情報が入った
- ・資料室の展示資料 (指定文化財の資料) についてのみ行なった。
- ・石仏の倒壊などについてボランティアからの情報が寄せられた
- ・ (担当のため)

あつて良かったもの	なくて困ったもの
<ul style="list-style-type: none"> ・特になし ・無し ・特になし ・重大な被害がなかったため、特になし ・特にありません ・テレビ (被害状況等、情報収集に役立つ) ・テレビ (職員の情報収集) ・テレビ、インターネット環境のあるパソコン ・ラジオ ・ラジオ ・懐中電灯 ・車 ・車：電車が止まったので。(移動のため) ・館専用車 (職員等の帰宅) ・毛布：冬なので地震後待機していた来館者が利用することができた。 ・書棚の最上段 (6段目) に地震対策としてブックキーパーを設置し、有効に作動した。事後5段目も設置。 ・ライト、発電機 (温室内) ・デジタルカメラ、インターネット、収蔵棚の転倒防止ロープ ・毛布、備蓄飲料 (帰宅困難者受け入れ) ・公衆電話・ツイッター (外部との連絡) ・携帯電話充電器、落下防止のワイヤー ・耐震ケース ・食料、TV ・停電時のヘッドランプ、携帯ラジオ、防水シート、紙と鉛筆、飲料水、保存食、寝袋、緊急連絡手段 (携帯電話、カード)、自転車 ・携帯電話使用 ・公衆電話、水・食料の備蓄品 ・災害用グッズセット 	<ul style="list-style-type: none"> ・電池 ・電気 ・ガソリン ・テレビ、ラジオ ・テレビ、ラジオ (館内のPCはアクセス制限がきつく、報道情報が得にくかった) ・テレビ等の映像による情報 ・テレビ (情報収集用) ・黒電話のような停電時でも使用可能な電話機 ・地元の情報 (テレビ等の報道で被災地の状況はわかっていたが、意外に地元の細かい情報が入手しにくかった) ・上部組織である市役所 (本庁) への連絡手段 (電話が通じない) → 現在は、防災無線が導入された

11

6. 自由意見 ※アンケートへの感想等は除く。個別の自治体名・博物館名が出ているものは適宜改めた。

- ・温室のガラスの飛散が懸念されたので、震災後、耐震性のガラスに換えた。
- ・災害時の帰宅困難者を考え、職員の3日間の食料・備品を蓄えています。
- ・大学付属施設のため、防災マニュアルは大学規定のものに従っています。同様に備蓄品も大学の別の部署が管理しています。
- ・防災組織体制などは、(注：上部組織の) 体制に従う。
- ・4月に館内ギャラリーの天井部品が落下する事故が起きた。震災との因果関係についてはどこまであるかは不明。
- ・現在当館が所在している建物の、耐震補強工事を予定しています。
- ・本部と連絡がとりにくい距離であり、電話線等も寸断された場合、まったく状況がつかめなくなる。似た境遇にある他館がどのようなマニュアルを作成しているのを知りたい。
- ・個人の施設館では防災体制を強化することは実施が難しいです。マニュアルも知らず、孤立しているので、改善が難しいです。
- ・防災マニュアルのうち、文化財に関するものが未整備なので、それを整えてゆきたい。他館の事例を知りたい。また、文化財以外に関するものの研修等を行っていないので、実際にどのように対処するか具体的なところが弱い。他館ではどの程度の頻度で実施しているか事例を知りたい。そして、勤務日によって職員の人数が異なるため、少数人での対応マニュアル等の整備をしてゆきたい。他館の事例を知りたい。
- ・山合いの交通の便の悪い場所に位置する施設なので、災害時にはかなり早い段階から危険予測をしていかねばなりません。また、備蓄や訓練も多くの事が必要ですが、予算や人員の関係で未だ十分に出来ているとは言えないのが現状です。
- ・公立で自治体運営の博物館は、大きな災害が発生した場合には、まず地域住民の安心・安全のために職員が動かなければならないので、資料保全のための迅速な初期対応が困難だと予測されます。そんな中で同じ悩みをかかえる自治体の博物館の方々のご意見を聞かせていただければと思います。
- ・非運営 (指定管理者等) の博物館は、特別な取り決めがある場合を除いて、大きな災害が発生した時には自治体が直接対応することになるので、損壊した施設や資料の保全も含めて、どう対応できるのか課題があると思われまます。
- ・ (当館は) 博物館が管理している施設で、日常管理はシルバー人材センターに委託しています。展示している資料は、すべて博物館の収蔵資料なので、災害が発生した場合、施設の損壊や資料の保全については、博物館で対応することになっています。
- ・交通手段の確保が難しくなるような事態についても、対応の取り決め、明文化、日頃からの周知が大切と強く感じました。これにより、緊急車輦、優先すべき車輦のよりスムーズな運行 (燃料の確保、渋滞の緩和など) が図れるに違いありません。
- ・博物館は災害時、いろいろな意味で危険な場所であり、避難場所として指定することは避けたいほうが良い。
- ・市の一部署であるため、災害発生時には、職員は市の防災計画に則った行動が求められる。このため、被害が発生したとしても、ただちに復旧等の作業にかかることができるか、懸念される。
- ・市、都の指定文化財 (建造物) であるため、耐震化等、建物自体の防災対策を取りにくい。
- ・防災に関するマニュアル及び訓練をとおして、様々なケースに対応できるようになることが必要だと考える。当館では、食料や水等の備蓄はないが、帰宅困難者が出る可能性が高いことから、今後の課題として考えなければならぬ。
- ・博物館の建物・設備は、共に老朽化しているために、必要に応じて、随時、修繕をおこなっている。特に、震災を想定しての防災対策を考えた場合は、全面的な耐震改修工事と資料の保全方法及び防災体制の確立が必要と考えている。
- ・防火対策として放水銃の設置が望まれる。
- ・防災マニュアルなど他館の事例を知りたい。
- ・無人に公開している古民家の防災等における現実的対応を他館の事例から学びたい。

12

・今後の参考とするため他館の状況を知りたいと存じます。

・資料保全マニュアルの作成の必要を感じる。他館ではどのようにしているのを知りたい。"

・同じ資料群を扱う人との交流が少ないと感じています。資料について話す機会が職員間で増えるといいと思います。

・他館のマニュアルなどの事例や、日常的にどのような取り組みをおこなっていくことが効果的なのかを、知りたいと思っています。

・防災体制、文化財用マニュアルなど、他館の事例を知りたい。

・浸水被害を受けた博物館の収蔵資料の救出に全国の博物館が協力したが、植物園関係にも声かけがあれば、さらに迅速な措置が取れたと思います。

・大学としては震災以降、防災対策に取り組んでおり、その一環として当館も対象となっている。今後は資料や来館者に配慮した防災マニュアルガイドラインの作成を考えている。

・東日本大震災後、初動対応のマニュアルなどを策定し、訓練を実施している。

・①災害支援の広域連携 ②連絡・広報手段

・連絡手段が課題。

◆個別シートのコピー配布の可否 (無回答を除く)

→不可が多数だったので、可とした館についても個別シートの配布は見合わせました。

以上、報告します。

ご協力いただいた館のみなさま、誠にありがとうございました。

平成 26 年 10 月 30 日

東京都三多摩公立博物館協議会
国文学研究資料館 3 研究グループ

13

他館との連携と自館の活動

東村山ふるさと歴史館 寺西明子

今年度も丘陵地帯故の天候不順に屈せず「狭山丘陵市民大学」を開催することとなりました。以前にも報告いたしましたが、平成11年度より東大和市立郷土博物館と、平成24年度より武蔵村山市立歴史民俗資料館とともに3市でこの市民大学を開催しています。

例年1つのテーマに基づき見学会・講演会等複数回の企画を行っており、今回はテーマを「尾張家御鷹場」と定めて現在実施中です。

第1回(1月31日)は日本放鷹協会鷹匠のご協力をいただいて放鷹の実演を見学し、第2回(2月14日)は同協会の蛭田晶子先生に御講演いただきます。第3回(3月14日)には各市の所蔵する文書資料を持ち寄り、原資料を前にして解説を行う予定です。

他市との連携により、運営面で実施場所・資金・事業形態資料などの選択肢が拡大することもこの市民大学の魅力です。しかし一番の醍醐味は、参加者の皆様に、近世共に尾張徳川家の鷹場支配下にあった3市の文書資料を一堂にお見せすることによって、個々の資料を多角的に再発見していただけることにあるのではないかと思います。

さらに、この市民大学をきっかけとして興味を深化させていただければという思いから、館内において尾張家御鷹場に関する事業を試みました。

常設展示室の一部に鷹場支配資料を展示し、その文書資料のコピーを手に取りじっくり座って辞書を繰りつつご覧いただくための「古文書閲覧会」を開催しました。通常この閲覧会は月1

回古文書ボランティアによって運営され、その場で勉強会も開催されています。

また、「市史を読む会」と題し、平成15年に刊行された東村山市史をテキストにして各分野専門の学芸員が話をするというゼミ形式の事業を月1回開催していますが、その中でも御鷹場について取り上げ好評を博しました。

今後益々多くの地域と繋がって新しい試みを模索していくと同時に、自館においてできることも再考していきたいと思えます。

また、東村山市は平成26年10月に市制施行50周年を迎え、ふるさと歴史館では記念事業として企画展「市制施行!東村山13町大集合」、特別展「下宅部遺跡店 縄文の漆」を開催しました。



1月31日放鷹実演会

平成26年度の事業等から

武蔵村山市立歴史民俗資料館 堀部由美子

1 平成26年度資料館事業

当館では、例年、春の企画展、夏休み期間中の子供企画展、秋には東京文化財ウィーク期間中に行う特別展、冬には東京大空襲のあった3月に企画展として「武蔵村山の戦争資料」展といった展示事業を実施してきました。

その他に、年中行事展として5月「端午の節供」、7月「七夕飾り」、1月「正月飾り」、2月「桃の節供」を季節ごとに開催しています。しかし、本年度は、9月から12月にかけて資料館改修工事の実施が予定されていた(休館期間は平成26年9月から27年1月末まで)ため、該当期間に実施予定であった展示事業を休止としました。

また、今年度の教育普及事業としては、単独の主催事業としては、はじめて“染色”をテーマに実施した夏休み子ども体験教室「自然を染めよう」や毎年恒例の星空観察会などを行いました。

2 資料館改修工事の概要

前述の改修工事は、特定防衛施設周辺整備調整交付金を充

当して行ったもので、来館者の利便性の向上を図るため、昭和56年の開館当初より、大規模な改修が施されることなく、老朽化していた施設の改修を行ったものです。

主な改修箇所としては、空調機の入替え、屋根・外壁の塗装改修、館内(収蔵庫・整理室を除く)の床・壁の改修、事務室



夏休み子ども体験教室「自然を染めよう」

の0Aフロア化、展示室照明のLED化などがあげられます。

この工事は、常設展示のリニューアルを目的とした改修工事ではありませんが、資料館の再開時期にあわせ、常設展を復旧させる際には、展示構成を一部見直し、これまで常設では展示さ

れていなかった資料を展示に組み込んだり、来館者の方が、その道具の使用方法をイメージしやすいよう、イラストや模式図を用いたパネルを設置するなどの点に配慮しました。



常設展示室の様子①



常設展示室の様子②

企画展「彫刻家 澄川喜一と東京スカイツリー®」実施報告

清瀬市郷土博物館 柳澤 剛

清瀬市郷土博物館は、昭和60年に開館し、本年度に30年目を迎えました。それを記念した企画展「彫刻家 澄川喜一と東京スカイツリー®」についてご報告します。

反(そり)と起(むく)りのある造形美を追究している彫刻家澄川喜一氏の作品展として、平成26年10月4日から平成26年10月19日まで開催しました。氏は清瀬市に居を構え制作活動を展開している名誉市民で、日本藝術院会員でもあります。代表作「そりのあるかたち」シリーズ、デザイン監修を行った東京スカイツリー®のイメージに通じる「TO THE SKY I」などを含む全15点で構成しました。

野外彫刻以外では木彫のイメージの強い氏ですが、本展では素材を吟味し使用する姿勢に着目しました。木に限らず、ブロンズ、石、金属の素材で制作された作品を展示しました。

また、東京スカイツリー®のソラマチ広場に



企画展「彫刻家澄川喜一と東京スカイツリー®」チラシ

設置された「TO THE SKY」や、それ以前に手がけた、東京湾アクアラインの「風の塔」、「カッターフェイス」の写真パネル、東京スカイツリー®の建設工事を担当した株式会社大林組の協力で同ツリーの建設の様子も紹介しました。

会期中は、1,400人を超す方々にお越しいただき、澄川作品の奥深さをご堪能いただきました。

そして、関連事業として実施した、①作家によるギャラリートークでは直接作家と触れあえ、②株式会社大林組担当者による講演会「東京スカイツリー®の建設～世界一の高さへの挑戦～」では、建設現場から知見提供し、それぞれ展示を見ただけでは味わえない刺激があったものと思います。



会場内作品配置

園内野鳥観察の行方

府中市郷土の森博物館 中村武史

開館当初から毎年コンスタントに実施している自然観察会。従来行って来た自然観察会の目的は、府中に残る豊富な緑を認識してもらうこと。市の南縁を流れる多摩川を始め、市を東西に横切る段丘崖、市街地にこんもりと盛り上がる浅間山など、都市化が進行する中で特徴的な環境を有する府中の自然を体感できるようプログラムを考えてきた。それぞれの環境(場所)と観察対象(生物)を、季節に照らし合わせながら選択し、毎回テーマを変えて散策を楽しんでいるが、相手が自然であるが故、思うようには参加者を満足させられないケースもしばしば。長年の積み重ねにより、リピーターも増えてはいるが、フェイドアウトしていく人もいる。そんな中、通常の観察会以外に、園内の野鳥を観察する機会を設けている。

毎年秋口から冬にかけて、連続講座として都市化と野鳥を題材に室内講演を行っているが、シリーズの最後に当館園内でバードウォッチング体験を用意している。今年も「都市に渡って来た野鳥」と題し、本来の生息地を追われた野鳥が都市に侵入し定着を見た例や、冬鳥、外来種も混じる状況などを解説した。一通りの理解を得た後の観察実践となるわけだが、通常の開園時間(午前9時)以降から始めると、人の往来が多少影響して思うような成果が得られない場合が多かった。そこで、講座受講者のみ限定人数ということもあり、特別に開館前の実施を試みた。

早朝にもかかわらず(とは言っても7時半だが)、ほとんどの受講者が集まり、期待の面持ちで待っていた。12月も半ばに差し掛かり気温もかなり低かったものの、全員そんなことよりも早く1種類でも多くの鳥に出会いたい一心が表情に表れていた。初の試みは、やはり思惑通りには進まない。結局最初の1時間では、いつも通りの身近な野鳥に遭遇するばかりで、とっくに渡って来ているはずのジョウビタキやツグミにも会えない始末。自然観察の難しさを再認識した次第だが、8時半を過ぎた頃から展開は変わった。雑木林にチラチラ動く小さなシルエットは、シジュウカ

ラとエナガの集団だ。コゲラもクヌギ・コナラの木をつついてはいる。やはり人気の少ない園内では、幾分通常とは異なる風景があるようだ。そして一番の収穫は、アオゲラの確認であった。過去の園内観察では唯一の例があるのみで、今回が2回目の遭遇である。一同の興奮度はかなり上昇していた様子。その後はようやく冬鳥のジョウビタキと出会え、しかも珍しくメスの個体だったのは早朝効果に違いないと、参加者に対し冗談交りにアピールしてみた。

結局、予定を30分もオーバーするほど、会自体は大変充実した時間を過ごした。成果については、何せ初めてのことで、これ1回で結論付けられることでもないが、通常の観察会では出現しない種類が観察できたことだけは事実である。逆に、いて当たり前のスズメやムクドリ、ハクセキレイが出現しなかったのは不可解な結果。次年度以降に通常の観察会で、この方式を取り入れるかは少々躊躇の域を出ないが、今後の探鳥会の在り方に一考の余地があることだけは受け止めている。同条件で再度の実績を重ねてからの検討と同時に、他のプログラムでの可能性も考えてみたい。



節目の年に考える～資料館としてのあり方

日野市郷土資料館 秦 哲子

日野市郷土資料館は、この春、10年の節目の年を迎える。平成17年4月に現在地に移って以来、地域により密着した資料館を目指して、日野市郷土資料館協議会や日野市古文書等歴史資料整理編集委員会からの助言を受けながら、事業を展開してきました。

市民とともに「幻の大寺院『真慈悲寺』を探る」や「勝五郎生まれ変わり物語探究調査」「七生丘陵の自然とくらし探訪」「日野市域の古文書調査」「日野市のあゆみ50年の調査」など、各種調査・研究・事業の開催に取り組み、その成果は特別展や企画展・パネル展、毎年のイベント・講座・講演会、刊行物などに結実している。

今年の1月に行った「どんど焼き」では、市民との交流が深められ、地域の小正月の風物詩となっている。

また学校教育と連携して、昔の道具や脱穀体験、火起こし体験や考古資料の出前いっちょう(出張授業)などを依頼に応じて行い、中学生の職場体験も受けている。

新しい動きとして、デイサービス高齢者の見学も積極的に受け入れている。見学者たちは、かつて自分が使っていた道具を見ると、目を輝かせてこれはこう使うんだよと教えてくれる。資料館に来ると利用者たちの会話が弾むという。道具周辺にまつわる記憶と癒し効果に今後も期待するものである。

廃校となった小学校で活動している当館では、展示しやすい

壁面の設置など、今年度から3カ年かけて民俗収蔵展示室(済)・自然収蔵展示室・体験学習室のリニューアルを行っているところである。

10年の節目を迎えるにあたり、今までの伝統を受け継ぎながら、日野市郷土資料館条例に掲げられている「日野市に関する

資料の収集、保管及び陳列、調査研究に関する事業」を行っていくという原点を見つめ直し、市民1人1人が自分たちの住んでいる地域の歴史を語れる資料館作りをモットーに、「見る」「聞く」「触れる」「使ってみる」など実物資料の活用をとおして、利用者にとこれからも学びの場を提供していきたい。

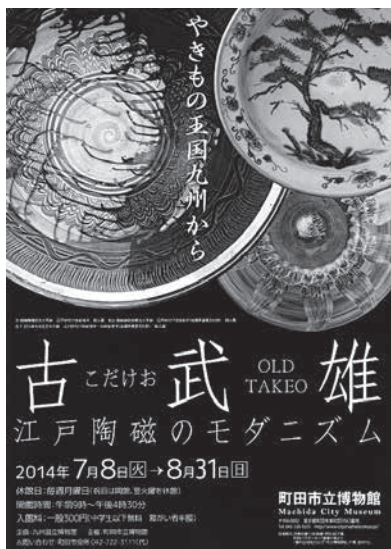
平成26年度の活動 — 体験講座を中心に —

町田市立博物館 村上智美

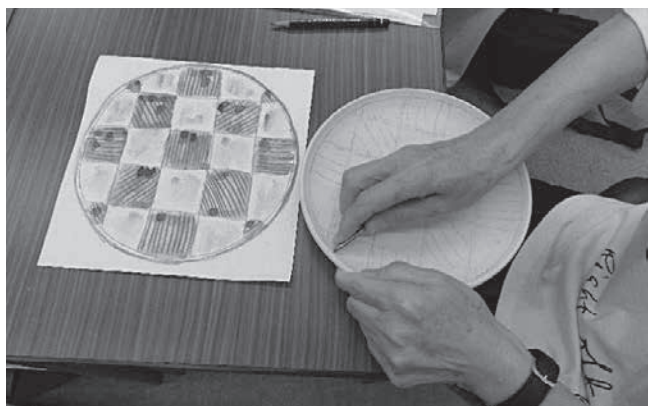
平成26年度は展覧会のみならず関連催事にも力を入れた1年でした。とりわけ出品作品に使用された技法の理解を深める体験講座の人气が高く、好評をいただいています。当館は平均して年5回の企画展示をおこなっていますが、ここでは2つの企画展と体験講座を報告します。

夏季開催の『やきもの王国九州から 江戸陶磁のモダニズム 古武雄』(7/8～8/31)では、伊万里焼や唐津焼の故郷である佐賀県武雄地区で江戸時代のはじめに生まれた陶磁器、古武雄の大胆斬新なデザイン

を紹介しました。同展の夏休みやきもの体験講座「君にもできる! 古武雄の絵付け・流し掛け・掻き落としに挑戦」では、参加者が自ら描いたデザイン画をもとに、皿に古武雄の特徴的な装飾技法である掻き落とし(引っ掻いて文様をあらわす)や流し掛け(色を大胆に流し掛けて着色する)などでダイナミックな文様の表現を楽しんでいました。



『やきもの王国九州から 江戸陶磁のモダニズム 古武雄』



体験講座「君にもできる! 古武雄の絵付け・流し掛け・掻き落としに挑戦」

つついて、秋季の展覧会『江戸の衣装競べ—国立歴史民俗博物館野村コレクション—』(9/13～11/3)では、江戸時代の女性の小袖(現在の着物)を武家・町人など、着用する身分に分けて紹介しました。同展のポスターやチラシにも使用した、友禅染めという技法で染められた名品にちなみ、体験講座「友禅染めをやってみよう!」を開催しました。講師があらかじめ糊で紅葉文様に縁取りした内側を、染料を含んだ筆で塗り、多色を使用する部分には水を多めに含ませてグラデーションにする“ぼかし”と呼ばれる技法を体験しました。文様や色彩の美しさを楽しみながらも、展示作品のように細かな文様を表現する技術の高さを痛感する体験講座でした。

全ての展覧会・関連催事の報告には至りませんが、町田市が進める「まちだ未来づくりプラン」の「賑わいのあるまちをつくる」「文化芸術活動が盛んなまちをつくる」という基本方針に寄与し、また町田市の(仮)町田市国際工芸美術館整備に向けて機運を高めるべく、魅力ある展覧会の開催や関連催事の充実に努めています。



『江戸の衣装競べ—国立歴史民俗博物館野村コレクション—』



体験講座「友禅染めをやってみよう!」

「まちだ未来づくりプラン」の「賑わいのあるまちをつくる」「文化芸術活動が盛んなまちをつくる」という基本方針に寄与し、また町田市の(仮)町田市国際工芸美術館整備に向けて機運を高めるべく、魅力ある展覧会の開催や関連催事の充実に努めています。

青梅市郷土博物館開館40周年と青梅線開通120周年

青梅市郷土博物館 鈴木章久

青梅市郷土博物館は昭和49(1974)年に開館し、昨年、平成26(2014)年に開館40周年を迎えました。それを記念し、平成26年10月4日から12月21日までの会期で、開館40周年特別展「青梅線開通120周年」を開催いたしました。

青梅線の根幹となる立川―青梅間に汽車が初めて走ったのは明治27(1894)年のことでした。青梅線はこの年に私鉄として開業し、西多摩地域の人々の重要な交通手段として、また産業を支える重要なインフラとして、車両の電化や駅の新設、国有化などを経ながら発展し、平成26年に開通120年を迎えました。

当館には、昭和19(1944)年に青梅線が国有化されるまで経営を行っていた旧青梅電気鉄道株式会社の資料が収蔵されています。平成6(1994)年～翌7(1995)年にかけて寄贈された膨大な旧青梅鉄道の資料は、資料の収蔵を契機として各分野の専門家により結成された「青梅鉄道資料調査会」によって、永年にわたって、研究が行われてきました。

今回開催した開館40周年特別展「青梅線開通120周年」は、平成17(2005)年度に開催した特別展「青梅線玉手箱」をベースに、「青梅鉄道資料調査会」の活動により新たに判明した結果を盛り込み、開催いたしました。展示室には青梅鉄道に関する

様々な資料が並び、博物館が青梅鉄道一色に染まりました。期間中には多くのお客様にご来館いただき、販売した図録も早々に完売し、再版がかかるなど、大変大きな反響をいただきました。

また、特別展の開催にあたっては青梅線沿線の立川市・昭島市・福生市・羽村市・奥多摩町の博物館や教育委員会と連携して事業を実施し、「青梅鉄道資料調査会」の方々による講演会を各市で行いました。講演会には多くの方にご参加いただき、ご好評をいただきました。

今後も貴重な青梅鉄道資料の調査を進め、展示・企画に活用していきたいと考えております。



国指定重要文化財「小林家住宅保存修理事業」完成報告

檜原村郷土資料館 清水正治

小林家は、江戸時代に藤原地区の組頭を勤めていた家柄であり、東京の山地の民家として、村一番の古い家といわれ、標高754mの南斜面に立つ一軒家で東京都から山梨県へかけての民家の関連をすることができる貴重な建物です。

建物は、昭和53年1月に国の重要文化財に指定されました。建築年代は、建物の構造と当家に組頭としての古文書が残されていることから見て、江戸時代中期の元禄16年頃に建てられたものと推定されます。

本屋は、建坪約53坪で西側面を除く三方の縁を後設、南正面はせがいで造り、屋根は、茅葺で入母屋造りの形式を持っています。



建物の内部は、奥でい(8畳間)は天井板が張ってあるが、そのほかの部屋は天井を張らず梁等の骨組みが見られるようになっております。

内部は、土間・ざしき・なんど・とばでい・奥でい・床の間が設けられています。そのほか付属屋として厩・便所・倉・納屋があります。

平成23年度から実施した保存修理事業は、平成27年3月で竣工となります。平成26年10月に母屋が完成し、現在、外構工事である管理棟の建築工事等が進められています。

一般公開は、平成27年4月以降を予定しておりますので、東京都の西端に位置する檜原村の国の重要文化財で東京都内では一番標高の高い山岳民家ですので、是非ご覧いただきたいと存じます。



廻り廊下は、雨戸の外側に設置されており、当時の建築様式がうかがえる。

旧市倉家住宅の修復作業と最近の活動報告

あきる野市五日市郷土館 関根輝雄

1. 旧市倉家住宅の修復

旧市倉家住宅(あきる野市指定有形文化財)は、平成12年に五日市郷土館の敷地内に移築復原した茅葺き屋根の建物です。移築後、約14年の月日が経過し屋根の茅や杉皮、さらには建物内部の壁がかなり傷んできました。



修復作業の様子

このため、平成26年9月から平成27年2月までの約6ヶ月をかけて茅の葺き替え等の修復作業を行ってきました。

今ではなかなか見る機会も少なくなった茅の葺き替え作業を多くの人たちに見てもらうため、現地説明会を行いました。当日は、あいにくの雨模様の中にもかかわらず多くの方にご参加いただき、参加者は皆熱心に茅葺職人の説明に聞き入っていました。

旧市倉家住宅は、平成27年2月に修復作業が終了して、3月1日から再び一般公開が始まります。ぜひご来場ください。



修復作業現地説明会の様子

2. 最近の活動報告

平成26年度は、旧市倉家住宅を使った年中行事の展示は修復工事のため8月までとなりました。7月に「機織り体験教室」を行

い、8月の最終の土曜日は、五日市地域で毎年行われるヨルイチに合わせて、ボランティアの市民解説員による「昔ばなし」と秋川キララホールとの共催事業としてヴァイオリンミニコンサートを旧市倉家住宅を使って行いました。夏の夜のひと時、多くの方々にご来場いただきました。



機織り体験教室



「昔ばなし・語り」



ヴァイオリンミニコンサート

企画展「青鉄と五鉄」

立川市歴史民俗資料館 高橋 学

当館では企画展「青鉄と五鉄」を平成26年10月21日から12月14日まで開催した。「青鉄」・「五鉄」とは、それぞれ青梅鉄道・五日市鉄道の略称であり、平成26年は青梅鉄道(現JR青梅線)の立川～青梅間の開通120周年、五日市線の立川～拝島間の廃止70周年にあたることに因んで企画した。鉄道に関する展示は平成22年の「甲武鉄道と立川」展以来4年ぶりであった。

この展示は「青梅鉄道120周年 青梅線沿線6自治体連携事業」の一環として、青梅市郷土博物館・羽村市郷土博物館・福生市郷土資料室と合同で、青梅鉄道に関する展示を行うことになり、展示以外にも連携して講演会や展示解説会も開催することになった。

当館では青梅鉄道(線)関連の資料は、ほとんど所蔵していないので、東京都公文書館所蔵資料と青梅市郷土博物館が所蔵している「青梅鉄道資料」を撮影・借用して展示する計画であった。青梅市教育委員会より『青梅鉄道資料目録』が刊行されており、立川に関連する資料を閲覧・借用する際には大いに役立った。もし公表されていなければ、当館では青梅鉄道に関する展示はできなかったと考えられる。

青梅鉄道を概説・通史的に展示すると、同じ資料を使用するので、青梅市郷土博物館の展示の通史部分と重複してしまう可

能性が高く、できるだけ立川と関係のある資料で展示構成しようと努めた。地域博物館における鉄道の展示は「鉄道の発達と地域の変容」という視点で展示構成するのが常道といえるであろう。前述した「甲武鉄道と立川」展では、そうした視点での展示も織り込めた。しかし、今回の展示においては、立川市域はどちらかというと青梅鉄道より甲武鉄道(現JR中央線)の影響が強く、鉄道と街のかかわりという視点での展示は難しく、より細部にこだわったややマニアックな展示となってしまった。結果として鉄道に関心の薄い層にとっては、やや難しくなってしまったことは否めないだろう。

企画展以外のイベントとしては、プレ展示と称して10月18日・19日に、戦前に箱根駅伝の代替として行われた「青梅駅伝」を取り上げた「大学駅伝と青梅電気鉄道」を開催した。その他にも講演会「青梅鉄道資料と立川」と現地解説会「五鉄跡を歩く」を開催した。企画展関連の講座等を行ったのも、平成13年開催の「中世の立川を探る」以来であった。「青梅鉄道120周年…」に参加することにより、展示だけではなく、関連イベントを開催して企画に「厚み」を持たせることができた。他館と連携して事業を展開することは、スケールメリットもあり、今後も機会があれば参加していきたい。

小金井村の閻魔堂

小金井市文化財センター 多田 哲

西伝坊 下山野にあり。村民(関)勘左衛門・(鴨下)八郎兵衛兩人墓地なり。三間四方の堂内に十王の木像を安せり。金蔵院持。(以下略)

『新編武蔵風土記稿巻之93 多磨郡之5 下小金井村』

江戸期を代表する武蔵国地誌に触れられているこの墓地は、小金井小次郎の墓があるので有名な鴨下・関家墓地。『小金井市誌V 地名編』では鴨下八郎兵衛の屋敷が元々は現在の西念寺付近にあり、その地続きの屋敷墓であったと推定しています。気になるのは「三間四方の堂」で、十王像が祀られていることから西伝坊＝閻魔堂とみて間違いないでしょう。代々の地元民の墓地で墓守の「西伝」が閻魔様を祀っていたとしても、状況として不思議はありません。問題は当館で所蔵する文書に、この閻魔像について記録したものを見たことがないことです。現在、小金井で閻魔堂といえば貫井共同墓地にあり、安永6年銘の木造閻魔王坐像と十王像7体が現存しています。現在の市域がほぼ形成された明治22年の町村制施行により小金井村と貫井村は合併しますが、それまでは別々の村。とすれば、閻魔堂は小金井村には鴨下・関家墓地、貫井村には貫井共同墓地にそれぞれあったこととなります。地方文書に見当たらない小金井村の閻魔様がいつ亡失したのか、いささか意外ですが答えは新聞記事から見つかりました。

昨年秋の企画展では『新聞記事に見る小金井』と題して、明治の新聞創刊時から昭和30年頃までの小金井に関する記事を朝日・読売を中心に新たに調査し展示しました。小金井市では新聞記事に特化した資料集を刊行しておらず、当館にストックがある記事も断片的であり、今回の調査を期に、これまで未見であった興味深い記事を多数発見できました。その中の見過ごしてしまいそうな短い記事。

小金井村の閻魔堂焼失 一昨夜十一時半府下北多摩郡小金井村千四百七十八番地の閻魔堂より出火し同堂を烏有に帰せしめたり

『明治31年11月17日 東京朝日新聞』

小金井村の閻魔堂が火事で焼失したと、ただそれだけの記事ですが、記事中の住所1478番地は鴨下・関家墓地の東側の敷地です。

文化・文政期の官製地誌でしか見られない記述が、明治の新聞記事で補完される。何やら不思議な感動すら覚えます。新聞記事に誤りや曖昧さは付き物ですが、それを差し引いても忘れ去られてしまった当時の状況を知る調査がいのある資料といえましょう。

特別展「八王子の春の蝶」と皆既月食観望会

コニカミノルタサイエンスドーム(八王子市子ども科学館) 森 融

26年度も通常のプラネタリウム投影や講座を開催してきましたが、初めて取り組んだものを二つ挙げます。

ゴールデンウィークの5月3日から6日まで、市民の方の蝶や昆虫を研究するグループの協力で、特別展「八王子の春の蝶」を開催しました。

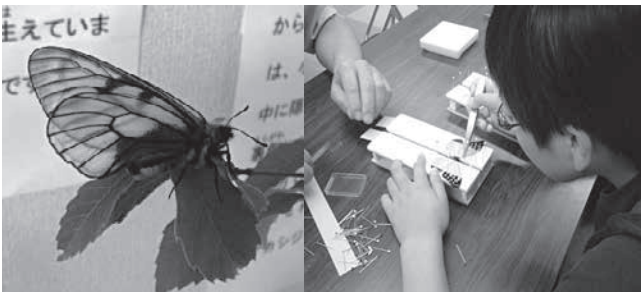


会場は昨年改修をおこない、広くなって間仕切りもできた2階の講座室です。

奥側の部屋にはグループの皆さんのコレクションの中から高尾山をはじめ八王子で採集された蝶とその解説が展示されました。昔はたくさんいたのに最近見かけられなくなった蝶についての解説もあり、環境の変化も考えさせられました。また、生きた幼虫の展示のため、幼虫が食べる植物が植木鉢ごと持ち込まれました。

隣の部屋では連日、蝶の標本作りと蝶の羽の模様を紙に写し取る「鱗粉転写^{りんぷんでんしゃ}」の講座を開催しました。参加者の親子にとっては初めての標本作りや鱗粉転写でしたが、グループの皆さんの指導により、熱心に取り組んでいました。

予定にはなかったのですが、グループの中学生、高校生が、その日の朝に採取してきた蝶も飛ばして、見学の方を驚かせ、子どもたちは大喜びで蝶を追いかけしていました。



4日間の見学者は約800人、講座参加者は約200人と大盛況となりました。

昆虫を専門とする職員がいない中、市民の方の協力でこのような特別展が開催できたことは、もちろんグループの皆さんのおかげですが、そのパワーと蝶に関する見識には感服するよりほかありませんでした。グループの皆さんには御礼を申し上げます。10月8日は平成23年12月以来、3年ぶりの皆既月食でした。前回は欠け始めが21時45分と観望会は開催できませんでした。今回は平日とはいえ、欠け始めが18時15分と観望会を開催するには絶好の時間帯です。

当日はNHKの首都圏ネットワークと地元ケーブルテレビ二つの生中継も入り、18時にプラネタリウムでの事前解説が終わると、参加者は一斉に正面玄関前に出て、にぎやかな観望会となりました。

ところが、肝心の月は、欠け始める前に少しだけ雲間から見えたものの、その後ずっと雲から出ず。

NHKスタッフのモニタには他地点からの月食中継が映っていたり、参加者の子どもが持つ携帯からはツイッターなのか、各地の月食の写真がアップされていて、曇っているのはこの辺りだけかと悔しい思いでした。



結局NHKは子どもたちにインタビューをするなど、放送時間中に2回放送されましたが、皆既月食の赤い月は見えないままでした。

皆既食の終わりの20時24分になっても雲は取れず、観望会は解散としました。その後、一時的に月が雲から出ましたが、雲は多いままでした。

次回4月4日、19時16分からの皆既月食に期待したいと思います。

「学芸員養成課程展示室」平成26年度の活動

首都大学東京 91年館(学芸員養成課程展示室・実習室) 小林加奈・村田昌則

当館は平成24年に展示施設として利用を開始しました。名称のとおり、学芸員養成教育のために使用する一方で、学外の皆様にも公開しており、大学の授業期間中には常設展示をご覧ください。また本年度は2回の企画展も実施しました。

企画展「《もにゅキャラ》考現学 まちのモニュメントになったマンガ・アニメのキャラクターたち」(7月17日～7月30日)

「サザエさん」や「ゲゲゲの鬼太郎」や「ドラえもん」など、モニュメント(記念碑)の姿で、まちに増え始めている国民の人気キャラクターたち。本企画展ではこれらを《もにゅキャラ》と名付け、文化的流行や社会的動向と照合しながら、メディア文化論的考察とともに紹介しました。期間中に実施したシンポジウムでは各方面からの出席者によって活発な意見交換が行われ、今後の研究展開が期待される会となりました。

企画展・シンポジウム「伝統文化は誰のもの?—文化資源をめぐる協働を考える—」(10月31日～11月13日)

アート作品におけるオリジナルと模倣・複製との関わり、そして文化的資源の利用と管理(とくに先住民の知的財産の共有と協働)をめぐる諸問題について取りあげたこの企画展は、シンポジウムの開催や、展示制作段階からの学芸員養成課程の学生の参加により、テーマに関する議論・考察がいちだんと深まるものとなりました。会場では米国南西部先住民ホピの銀細工や資料映像、現代のアイヌ工芸作家の緻密な複製に基づく作品群を紹介し、時間をかけてご覧になる方も多くいらっしゃいました。

ご紹介した企画展の他にも、大学説明会(夏季・入学希望者向け)や、大学祭(11月)といった行事にあわせて開室も行っており、例年好評です。これからも地域の皆様楽しんでご利用いただける施設となるよう、活動を続けてまいります。



企画展会場の様子



シンポジウム会場の様子

たましんギャラリー開廊40周年記念 多摩の作家展I～V

(公財)たましん地域文化財団 美術資料室 滋野佳美

平成26年度、当財団が運営するたましんギャラリー(たましん本店9階)が開廊40周年を迎えました。これを記念し、たましん歴史・美術館(たましん国立支店6階)において「多摩の作家展I～V」を開催しました。

たましんギャラリーでは、これまで大変多くの多摩地域の作家に出展いただいています。たましんギャラリーをひとつの起点とし、多摩の作家との深い繋がりによって形づくられたのが、現在のたましんコレクションです。「多摩の作家展」では、40年の歴史を築いた多彩な作品を、5会期にわたってご覧いただきました。

作品の多彩さ故に、実際の展示には少々悩むこともありました。作品一点一点と向き合うことで、作家の人生を垣間見ることができたのみならず、40年という時間をもたらした多摩の様々な変化を実感することにもなりました。

会期中は、多くの方に時間をかけて鑑賞いただき、多摩地域

の美術のよさを再発見した、という感想を少なからず頂戴しました。全5回実施したギャラリートークでも、皆様に熱心にお聴きいただき、ときには大変鋭い質問に考えさせられることもありました。出展作家にも多数お越しいただき、つくり手としてのお話を直にうかがえたことは貴重な経験でした。

当財団発行の季刊誌『多摩のあゆみ』(歴史資料室編集)の表紙を彩った作品も多数展示したことから、歴史資料室の協力をを受け、関係するバックナンバーを配置したところ、多くの方が手に取っていただきました。表紙裏には作家のコメントが掲載されているため、作品鑑賞の一助ともなったようです。

スペースの関係などもあり、多摩の作家による作品の全てをご紹介することはできませんでしたが、美術館の立ち位置が根本的に問われている今、多摩にある美術館・ギャラリーとしての意義を考えなおす好機となったと思います。



ギャラリートーク風景①



ギャラリートーク風景②

奥多摩 水と緑のふれあい館 活動報告

奥多摩水と緑のふれあい館 天沼晋志

本町では、関東内陸や甲信地方で記録的大雪となった本年2月の豪雪で積雪量は1m以上に達し、孤立した地域が発生するなど大きな被害がありました。当館では大雪による被害はありませんでしたが、国道や都道が交通止により、2月15日から3月6日まで臨時休館しました。

東日本大震災後の影響で減少していた来館者は、昨年度震災前の水準近くにりましたが、今年度は天候に恵まれなかったことや春の大雪の影響で減少しました。

当館は、奥多摩の歴史・民俗芸能、森と水のかかわり、小河内ダムの資料等を展示しております。特に「水が生まれる」(緑のダムの秘密)や「水が輝く」(奥多摩3Dシアター)の展示コーナーは来館されたお客様(特にお子様向け)に好評をいただいております。

また、奥多摩湖に隣接し周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の彩色の変化を目の当たりに楽しめる場所に立地しているという当館の条件をいかし、館のPR活動に力を注ぐことや、水道局やJR東日本等、団体との共催事業の実施により入館者の確保に力を注いで参りたいと考えております。

今後も豊かな自然も体感できる博物館施設として、奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただけるよう管理運営を心がけていきたいと思っております。

26年度の当館の主な活動としては次のイベント等を実施しました。

- 4月19～20日・春のミニコンサート(2日間延べ4回公演)
内容：ソプラノ歌手の公演
- 6月1～7日・水道週間(7日間)東京水等配布
(都水道局と共同)
- 8月16日・夏のフラダンスショー
- 8月1～31日・奥多摩湖と周辺写真展
展示内容：奥多摩湖周辺の四季等
- 9月14日・水源地郷土芸能フェスティバル
内容：小河内の郷土芸能(獅子舞2団体及び鹿島踊りの上演)
- 10月1日・都民の日イベント(ビデオ上映等)
- 10月12日・ヘブンアーティスト公演(午前午後の2回公演)
内容：パルーンショー・マジック等
- 11月15～16日・秋のミニコンサート(2日間延べ4回公演)
内容：都民交響楽団の演奏
- 11月22日・写真コンクール入賞者表彰式
- 1月土・日・祝日 羊毛の紡ぎを実演
- 3月22日・川野車人形上演

※27年度についても春・秋のミニコンサートや郷土芸能の公開を予定しています。



秋のミニコンサート公演



郷土芸能フェスティバルの鹿島踊りの上演

開館して20年が経ちました

くにたち郷土文化館 安田幸世

くにたち郷土文化館は1994(平成6)年11月に開館し、これまで多くの人たちの助けによって、無事に開館20周年を迎えることができました。当館はメインテーマを「過去・現在・未来を結ぶ—多摩川が育んだ段丘(ハケ)とともに生きる私たち」とし、日々奮闘しております。

2014(平成26)年度に当館で開催した企画展示は4本で、展示タイトルと期間は次の通りです。

- 1:「くにたち あの日、あの頃 —写真に見るまちの移り変わり—」(平成26年4月26日～6月1日)
- 2:「第20回 紙の工芸展」(平成26年8月30日～9月23日)
- 3:「くにたち発掘～最近の発掘調査から～」(平成26年10月24日～12月9日)
- 4:「むかしのくらし展」(平成27年1月10日～3月16日)

ここでは3つ目に行われた「くにたち発掘～最近の発掘調査から～」の紹介をいたします。

「くにたち発掘～最近の発掘調査から～」の開催契機は、2012(平成24)年度に国立市青柳に位置する緑川東遺跡から、石棒4本が発見されたことです。この4本の石棒は大型で完形品であり、並べて配置されていました。このことは多くの考古学者の注目を集め、文化庁等が主催となって開催されている「発掘された日本列島2013」展でも展示されました。

本展の構成は6つのテーマに分けられ、テーマは次の通りです。

- 1: 国立市の遺跡概要
- 2: 緑川東遺跡
- 3: 下谷保古墳群
- 4: 梅林1号横穴墓
- 5: 青柳遺跡
- 6: 仮屋上遺跡

テーマは遺跡毎に分かれており、それぞれ概要、発掘成果の紹介をしました。

関連事業は遺跡見学会と講演会、シンポジウムが行われました。講演会とシンポジウムは予定していた定員を超えた参加者に来館いただき、質疑応答も活発に行われました。



企画展キャラクター やぼわん



展示風景

平成26年度の活動報告

羽村市郷土博物館 川崎 渚

当館では「多摩川とともに」をメインテーマに、羽村の自然・歴史・文化を伝えるため、玉川上水、養蚕、中里介山に関する資料を館内に、また屋外には羽村の歴史を今に伝える「旧下田家住宅」などの常設展示を行っています。今年度については、次の企画展を行い、羽村の歴史・文化等を紹介しました。

企画展 「はむらの思い出～今昔写真展」

羽村の名所・施設・祭礼等の今と昔を、また養蚕・養豚・酪農を写真で展示し、羽村の思い出を振り返りました。

展示期間 3月29日～6月29日

企画展「カイコの中には何がある?～カイコのつくる糸の不思議～」

蚕がマユをつくり、そのマユが糸や製品になるまでを、段階を



企画展「はむらの思い出～今昔写真展」展示の様子

追ってわかりやすく展示しました。

展示期間 7月19日～9月23日



企画展「カイコの中には何がある?～カイコのつくる糸の不思議～」展示の様子

青梅鉄道120周年 青梅線沿線6自治体連携事業企画展「青梅線にゆられて」

青梅鉄道開通120周年を記念し、企画展・ナイトミュージアムシアターを開催しました。連携事業としては、6自治体(奥多摩町・青梅市・羽村市・福生市・昭島市・立川市)合同の講演会、4館(青梅市・羽村市・福生市・立川市)合同のミュージアムトーク・スタンプラリーを行いました。企画展は、羽村市民のくらしと青梅線をテーマとし、青梅線と羽村の120年を振り返ると共に、市内5歳児629名の描いた鉄道の絵も展示しました。

展示期間 10月4日～12月23日



企画展 企画展「青梅線にゆられて」展示の様子

ミニ展示「発掘調査体験成果報告展～掘って測って大発見!～」

展示期間 4月19日～8月10日



ミニ展示「発掘調査体験成果報告展～掘って測って大発見!～」展示の様子

ミニ展示「玉川上水～かたちとやくわりのヒミツ～」

展示期間 7月19日～12月21日



ミニ展示「玉川上水～かたちとやくわりのヒミツ～」展示の様子

ミニ展示「多摩川をわたるタカ」

展示期間 8月30日～11月30日



ミニ展示「多摩川をわたるタカ」展示の様子

開館40周年を迎えた地域博物館の資料収集活動

地域の人びとの記憶とモノを結びつける展示を目指して

調布市郷土博物館 金井安子

東京都三多摩公立博物館協議会の会員館32のうち、東村山ふるさと歴史館、府中市郷土の森博物館、町田市立博物館、青梅市郷土博物館、調布市郷土博物館は、昭和40年代に開館した博物館で、奥多摩町、八王子市、羽村市、福生市、瑞穂町の各館とともに、昭和54年の協議会創設時からの「オリジナル10」の会員館です。

当館の開館に至る経緯は、昭和30年に調布町と神代町の合併により調布市が誕生して以降、都市化が進むなかで、今のうちに伝統行事や風俗、民具等を収集保存し、記録しておかないと、将来、取り返しのつかないことになることと危惧した市民が、昭和39年に調布史談会を立ち上げ、資料館の建設運動が動き出したことが始まりです。昭和44年に、調布市郷土史料保存会が発足し、調査員が地域をまわって、資料の調査・収集に取り組みました。市民の活動の後押しを受け、昭和48年10月の市議会で博物館新築工事の議案が満場一致で議決され、昭和49年6月に竣工、11月24日から開館記念特別展「土に生きる」が開催されました。

開館から40周年を経て、近年、当館では考古・歴史・民俗・美術・自然等の分野とは別枠で、「地域資料」という括りのもと、収集対象を広げて、市内で開催されたイベント等の際に作られたグッズや記念品等の収集に努めています。市制施行や学校の周年事業の記念品、多摩川花火大会のグッズ、2002年のサッカーワールドカップに出場したサウジアラビア王国代表チームのキャンプ地に関する資料、大河ドラマ「新選組!」の放送にあわせ

て開催された新選組フェスタのグッズ等があります。

開館40周年を迎えて、平成26年7月27日から9月7日まで、地域資料を展示する「ちょうふ・これくしょん〜モノから見たわたしたちの調布〜」を開催し、来館者から「グッズ販売は知っていたが、改めてたくさんあるものだと感心。こういったものも貴重なコレクションになる」「調布グッズの多彩さは圧巻。新選組やFC東京、映画撮影所等がそろっているだけはある」等の感想が寄せられました。

今後も地域の人びとの体験や記憶と結びつく資料を収集し、来館者がモノと対話できるような展示をこころがけていきたいと思えます。



展示風景 FC東京とコラボレーションした新選組グッズ

吉岡堅二展と(仮称)東大和美術園特別公開

東大和市立郷土博物館 山本悦子

亡くなるまでの約半世紀を東大和市内で過ごした日本画家・吉岡堅二は、近代日本画界を牽引した昭和を代表する画家の一人でした。

市内には堅二が暮らした邸宅がそのまま残されており、一般公開をするため、現在、(仮称)東大和郷土美術園として整備を進めているところで、年に2回、春と秋に特別公開をしています。

今年度は11月22日(土)から12月23日(祝)に博物館で開催した企画展示「吉岡堅二展―旅の記憶―トルコに行く」の初日に合わせ、(仮称)東大和郷土美術園の秋の特別公開を行いました。

博物館での企画展示では、1966年と1968年に堅二が参加した東京藝術大学中世オリエント遺跡学術調査に関連した作品(トルコ・カッパドキアで行われたキリスト教洞窟修道院壁画模写や、調査中のスケッチなど)を展示し、従来の伝統的な表現に縛られない絵画表現を模索した様子を振り返りました。

(仮称)郷土美術園の特別公開では、今年度博物館に寄贈された堅二の日本画「柿」を中心とした作品展示と、母屋を利用したお茶会を催し、博物館の展示とともに、多くの方に来園していた

いただきました。

近年では、美術業界からも忘れ去られつつある吉岡堅二ですが、東大和市の文化的な財産の一つとして再びスポットをあて、盛り上げていこうという取り組みを行っています。



(仮称)東大和郷土美術園―吉岡堅二が生前使用していたアトリエー



(仮称)東大和郷土美術園—作品展示の様子—



「吉岡堅二展—旅の記憶—トルコに行く」会場の様子

多彩な情報にあふれた「幕末の八王子」をさぐる特別展

八王子市郷土資料館 加藤典子

八王子市郷土資料館では、平成26年10月1日から11月24日にかけて特別展「幕末の八王子—西洋との接触—」を開催した。本展示では、黒船来航を機に大きく変貌した幕末社会を八王子という一地域の視点から検証した。特に地域社会と西洋文化との接触という点に着目し、積極的な西洋情報収集がおこなわれていたことを示した。八王子では千人同心の松本斗機蔵が天保8年に『猷芹微衷』を執筆し、西洋諸国と対等な国家関係を築くことを提唱している。斗機蔵は尚歯会や葦山代官江川英龍と交流し、最先端の学識の共有をおこなっていた。展示では、斗機蔵所有の「両半球世界図」や江川代官宛斗機蔵書簡の写真などから西洋研究の様子を紹介した。

黒船来航以降は、軍事的な危機意識の高まりを受けて、知識人に限定されない国内外の最新情報の共有がなされた。八王子も例外ではなく、被支配者層による自主的な情報収集によって情報の価値化が進行した。また、黒船来航は人びとに金銭面・労働面の負担や軍事面での協力を強いている。本展示では、御用金徴収や台場建築にかかわる木材の伐採・運搬作業への従事などの負担について紹介することで、幕末期の八王子の人びとの生活を考察した。安定した村落経営のためには、正確な知識・情報の取得が必要不可欠である。特に八王子は江戸・横浜といった情報集積地に近く、これらの地域を経由した諸情報が流入した。本展示では地域史の視点を導入することで、閉鎖的ではない幕末の八王子の姿を提示した。

幕末の八王子において千人同心の存在は看過できない。多摩地域を中心に分布して居住した千人同心は、幕命により全国各

地の警衛に派遣され、西洋軍事技術の研究にもあたった。農兵とならんで地域の治安維持にも貢献している。特に派遣地において収集した諸情報は居住地域にもたらされ活用された。

千人同心の資料は多摩地域を中心に各地に残されている。本展示では、八王子の資料を中心に検討したが、今後は多摩地域を包括した研究が重要になるだろう。農兵に関しても多摩地域において九組合が設置されており、一地域を超えた広域的な研究が求められる。多摩地域の博物館で研究課題を共有し、協同的な取り組みがなされることがのぞましい。来館者からも多摩地域全体の動向について学びたいという声があがっており、今後の研究に生かしていきたい。



展示風景

展示における日本語表記 ～一字下げは行うのか?～

福生市郷土資料室 青海伸一

はじめに

より良い展示を行いたいとの思いで、多くの博物館の展示に触れる中、日本語の表記方法、特に改行時の一字下げについて考え直す事例にいくつか行き会った。そこでそれらから見える課題と福生市郷土資料室での取り組みについて紹介したい。

パネルやキャプションにおける一字下げ

ここ1年くらいの間で他の博物館に行った際、それまで気にしたことがなかった文章の一字下げについて、気になる事例に行き会った。それは、1つのパネルの中で、改行の際の一字下げが行われているものと行われていないものが混在したものであった。

そう思ってから意識的に様々な博物館のパネルやキャプションを見ていくと、一字下げを行うのか行わないのかということについて、何らかのルールを館内または展示担当者自身で決めているのだろうと感じる展示が比較的多く見られた。例えば、展示室全体を通してすべての文章で一字下げを行っているとか、逆にすべて一字下げを行っていないとか、または文章が長くなりがちなパネルでは一字下げを行うが、キャプションは文章量も少ないので一字下げを行わないなどである。

一方で、展示の担当者が2人になったのだろうか、そういう細かいルールの統一がなされていないなど感じる展示にもしばしば行き会う。特に最近ではメールなどにおいて一字下げを行わない文章を頻繁に使うようになり(それ自体の善し悪しを問うているわけではない)、1人で担当する展示であっても、一字下げを行ったパネルと一字下げを行っていないパネルが同じ企画展示の中で混在している事例にも行き会った。

実際には、パネルやキャプションが縦書きなのか横書きなのかということでも大きく答えが異なるようにも感じる。例えば縦書きのパネルでは一字下げを行う事例が非常に多く、一方、横書きのパネルやキャプションなどでは一字下げを行わない事例が見られる。個人的な印象では、横書きや比較的文章量の少ないキャプションであっても、改行が明らかにされている場合、一字下げが行われている方が読みやすいと感じる。

個人的な印象はさておき、現段階では明確な答えは持ち合わせていないので、どのパネルやキャプションでは一字下げを行うべきなのか、または行わなくても良いのかということは判りかねる。だが、この問題は一度気になりだすとかなり目に付くようになる。そういう意味からも、できれば展示室全体、または1つ

の企画展示、そうでなくともせめて同じパネル内での統一は図っていきたくて反省し、福生市郷土資料室でも意識的にパネルなどの見直しを行うことにした。

福生市郷土資料室は展示室が狭いこともあり、基本的には1つの企画展示を1人で担当しており、パネルもキャプションも同じ人が作成しているので、1つの企画展示内で一字下げが行われているパネルと行われていないものが混在するという事例は起こりにくい。特にパネルにあっては順路の関係もあり縦書きで作成することが多いことから、必ず一字下げを行っている。

一方のキャプションは人により一字下げを行ったり行わなかったりしていることが確認された。先にも述べたようにどちらが良いか答えを持ち合わせていないこともあり、当面1つの企画展示内ではどちらかに統一するという運用を行っている。皆さんの博物館ではどのようにしているのだろうか?

HP上の一字下げについて

展示室もさることながら、実は展示室内よりもこの一字下げを行うのか行わないのかという問題が進んでいたのがホームページ内での表記法であった。作成時期が違ったり、内容を書き換える人による癖が大きく反映しており、1つのページ内において一字下げを行っているところと行っていないところが混在していたり、改行時に空白行の挿入を行っているところと行っていないところが混在していた。

この問題を解決するため、どの表記法が一番見やすいのかということのを他のホームページなども対象に調査を行い、館内で検討を行った。その結果、福生市郷土資料室で作るホームページでは、本文について原則一字下げを行い、さらに改行時には空白行を挿入するというように統一を図った。

まとめに代えて

展示を行うにあたり、展示の中身については多くの学芸員が意識を集中させている。その一方、それらを表現する日本語の表記、特に一字下げについては非常に無意識のうちに行っているように感じる。

日本語自体あまり意識しないでも使えてしまうので、一字下げを気にする機会は少ないかもしれない。少ないからこそ使い方が混在してしまったのではないかと実感している。

皆さんの館では日本語の表記についてどれほど意識を働かせているだろうか?おそらく福生特有の問題ではないであろう。

特別展「ジブリの立体建造物展」の開催

江戸東京たてもの園 早川典子

江戸東京たてもの園では、2014年7月10日(木)～2015年3月15日(日)まで、特別展「ジブリの立体建造物展」を開催いたしました。本展は、スタジオジブリ作品に登場する様々な建物にスポットを当て、映画に登場する建物の模型や、映画に登場する建物の設定資料、背景画といった美術資料を展示しました。会期中は40万人以上のお客様にご来園いただきました。

スタジオジブリ企画の展覧会は、平成14年度～平成15年度に行われた「江戸東京たてもの園と千と千尋の神隠し」展以来となりました。



©Studio Ghibli

東京農工大学創基140周年記念写真展を開催しました

東京農工大学科学博物館 飯野孝浩

2014年は、本学の前身である内務省農事修学場および蚕業試験掛が軌を一にして設置されてから、140年という節目の年となりました。現在本学は農学部・工学部の2学部体制を取っていますが、140年の歴史の中で、両学部の全身となる組織群は目まぐるしく変化を繰り返してきました。その変遷の歴史は、教育体制の変化のみならず、近現代の日本の産業化の歴史ともシンクロしており、非常に興味深いものです。

本館では、両学部の歴史を写真で振り返る特別展「東京農工大学創基140周年記念写真展」を2014年9月15日から10月25日にわたって開催致しました。卒業生・修了生や近隣の方々のご来館を想定し、思い出話に花が咲くような、キャンパスの何気ない風景の写真を多く集めました。

本写真展の実施にあたり、多くの関係者の方々から写真の提供を頂きました。本学の同窓会からは、数千枚におよぶ写真コレクションをご提供いただき、写真の選定時には嬉しい悲鳴となりました。また、OGOBの方々からは卒業アルバムやスナップ写真をお借りしましたが、キャンパスの風景や変遷がわかる貴重な資料も多くありました。農学部の前身である東京高等農林専門学校卒業アルバムを見ると、東京帝国大学農学部から分岐した伝統を反映してか、戦中の暗い世相の中でもリベラルな学生生活を謳歌していた様子が伝わります。小金井キャンパスの航空写真からは、キャンパス設置時に半分以上の面積を占めていた桑園が研究棟に取って代わられていくさまが見て取れます。これも、産業の要請に従って繊維学部から工学部へと体制転換を

進めたことに対応しています。

絶え間ない変化の中でも、大学の使命は優秀な人材の輩出と、世界トップクラスの研究成果を生み出すことにあることは変わりません。本学の歴史を多様な視点から扱うことで、高等教育・研究の姿と成果を広く市民のみなさまにお伝えしていければと考えています。

写真は、140周年写真展の一部です。ポスターには、府中・小金井両キャンパスで設置以来の風景を留める建物を用いました。OGOBの皆様にご好評をいただいたのはキャンパスの鳥瞰写真で、記憶をたどりながら思い出話に花を咲かせる様子が印象的でした。



特別展「東京農工大学創基140周年記念写真展」

平成26年度の広報活動について

東京都埋蔵文化財センター 広報企画係 小西絵美

平成26年度企画展示「古代びとの祈りとマツリ」

今年度の企画展示は、平成26年3月15日より公開となりました。展示は縄文時代、古墳時代、平安時代の3つの時代に分かれており、各時代における人々の祈りや願い、まじない、信仰などに焦点をあて、モノや情景に込められた古代人の精神文化に着目しました。展示ホール中央の展示ケースでは、各時代の祈りやマツリの情景を再現しました。また、縄文時代の展示に関連して、展示している土鈴と土鈴形土偶の音を実際に聞けるように工夫をしました。団体見学の小学生たちは、我先にこの土鈴の音を聞いていたくらいです。



平成26年度企画展示のチラシ

「今月の逸品」

昨年度から継続するこのコーナー展示では、月替わりで多摩ニュータウン遺跡から出土した様々な資料を展示しています。また、速報展示として当センターが都内各地で行った発掘調査成果の一部についても紹介しており、今年度は三鷹市北野遺跡で出土した縄文土器の蛇体把手とあきる野市草木水遺跡出土の小型土器を展示しました。

今年度の体験教室やイベント

従前に行っている勾玉作りや縄文土器作り、トンボ玉作り、古代の糸作り、古代の布作り、火おこし道具作り、貝のプレスレット作りなどの各教室に加え、今年度は土偶作り教室を新設しました。土偶作り教室は親子向けと一般向けの2回開催し、親子対象の教室では比較的短時間で作ることができる板状土偶を製作しました。一般を対象とした教室では、板状土偶あるいは立

像土偶のいずれかの選択制としましたが、参加者の皆さんにはどちらも楽しみながら製作していただけたようです。

また、11月に開催した「古代カマド作りと食体験」は8年ぶりに復活したイベントで、実際にカマドを作り、そのカマドで米を調理するという内容です。カマドは藁を混ぜた粘土と石を用い、参加者の皆さんの手で作り上げていきます。「食体験」とあるように、イベントの最後にはカマドで炊いたご飯や蒸したご飯を試食しました。日常生活で炊くご飯とは少し違い、きっと特別な味わいだったことでしょう。

春の「縄文ワクワク体験まつり」や冬の「遺跡庭園であつたまろう!」では、例年以上に多くの方が参加されました。



「古代カマド作りと食体験」で作ったカマド

他館との連携事業

当センターの新たな試みとして、今年度は2つの施設と連携したイベントを企画、実施しました。連携した2館はいずれも埋蔵文化財とは直接的に結びつかないような異なる分野の施設で、ひとつは多摩動物公園、もうひとつは立川防災館です。多摩動物公園とは8月の下旬に「夏休み最後の自由研究スペシャルー縄文時代の人々と動物ー」を、立川防災館とは11月に「119番の日特別企画火おこし・消火体験ツアー」を開催しました。いずれのイベントも参加者の方には楽しんでいただけたようですが、初の試みということもあり、イベントの周知方法や当日の運営などさまざまな課題が見えてきました。



土偶作り教室で製作した土偶



多摩動物公園との共催イベントの様子

平成26年度活動報告

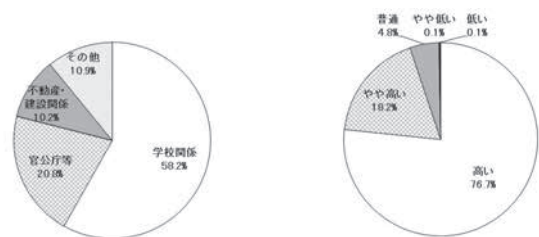
集合住宅歴史館 溝口 忠

平成10年4月に一般公開を開始した集合住宅歴史館は、独立行政法人都市再生機構技術研究所にある研究施設の一部で、戦前と戦後(昭和30年代)に建設された集合住宅の歴史を実物大で“見て・聞いて・学ぶ”ことができる施設であり、関東大震災復興のために建設された“同潤会代官山アパート”や公団設立初期に建設された“蓮根団地2DK”“晴海高層アパート”“多摩平団地テラスハウス”や“住宅設備の変遷”などをご覧いただけます。また同じ敷地にある他の研究施設とあわせてご覧くださいと集合住宅のことをより深くご理解いただけます。

施設の見学は、月曜日～金曜日の午後に事前予約制となっており、各組に説明者をつけて行っております。来場者のアンケートを集計した結果、平成26年度11月時点で業種別では学校関係が一番多く58.2%（前年46.1%）、次いで官公庁等20.8%（前年9.9%）、不動産・建設関係10.2%（前年19.9%）、その他10.9%（前年24.3%）の順となっております。一方、来場者の満足度は“高い”と“やや高い”を合すると約95%（前年約94%）の方から高い満足度が得られ、当研究所6施設の中でも特に人気がある施設となっております。



晴海高層アパート



見学者の業種

見学者の満足度

狛江市立古民家園(むいから民家園)活動報告

狛江市立古民家園(むいから民家園) 学芸研究部会 稲葉和也

むいから民家園は平成14年4月に開園してから13年間、市民によって管理運営されてきましたが、今年の4月からは市の直営となります。

狛江市は人口8万人足らずの市で、面積も埼玉県の蕨市に次いで狭く、その上戦中から続いていた精密機械企業が相次いで市外に転出したため財政も厳しく、博物館や美術館などの文化施設もありません。

そのような状況の下で20数年前市民によって古民家の保存運動が起こり、ようやく作られた古民家園でしたが、市はその古民家園を文化財の活動拠点とすべく直営で管理運営することになりました。

また保存運動から開園後まで活動してきた市民も高齢化し、若い世代に引き継ぎが出来ていなかったことや、年間40件以上の行事の中で、行政ではしにくいミニ動物園、流しそうめんや市の開催など、民家園にはなじまないと言われるイベントが、直営となる理由に挙げられています。

しかし、このむいから民家園は市民共有の文化遺産として、憩いの場としても市民から愛され、年間2万人以上の人たちが訪れてきました。また小学生には授業の一環として昔の暮らしを伝える場として利用されていますし、保育園帰りの母子が集まり、にぎやかになる日もあります。デイケアの老人たちもバスで訪れ、お弁当を食べて昼寝する日もあります。

昨今各地の博物館の入場者が減り、その活用や展示に苦慮されているところが多い中で、民家園を訪れる人が多いのは、民

家を肌で感じ、体験を通じて地域の歴史や伝統に接することができるからでしょう。以前は田舎のおばあちゃんの家で昔のくらしの体験が出来ましたが、今日田舎も近代化されてそれが出来なくなりました。

都会に保存されている古民家園はまさに田舎の実家の代替としても貴重な存在となっており、そこで行われる昔の行事やイベントを通して、昔のくらしが体験できるので、何度でも訪れる人が多いでしょう。

博物館はとかく昔の記録やデータを提供することが優先されますので、歴史に興味を持ってない人は何度も行く気になれません。しかし、昔のくらしの体験は歴史に分け入る導入として貴重なことです。民家を訪れ、昔の歴史に興味を抱いてから博物館を訪れるようになれば、様々な事が判って博物館も楽しくなることでしょう。

むいから民家園では年中行事や園内の植物の解説には地域の伝承や習わしを伝え、《狛江学》と称する講座では古老から様々なことを学ぶことが出来ました。博物館のような遺物や古記録からの解説ではありませんが、古老が見たこと、聞いたことには説得力があります。

現在市に引き継ぐために、民家の保存運動から開園後13年間の記録をまとめた記念誌を編纂中ですが、多くの市民が関わって運営されてきたむいから民家園の活動記録が、今後の運営にも役立つことを願うばかりです。

20周年を機に、より愛着を持たれるロクトへ

多摩六都科学館 経営管理グループ 藤江亮介

2014年3月に開館20周年を迎えた当館は、4月に次の10年を見据えた第2次基本計画を策定しました。これまでの科学館事業に加え多摩六都地域の人的交流の拠点としての役割をより一層強化していきます。

今年度を見ても、近隣の企業(シチズンやグローブライド、大林組等)や学校(東大や学芸大、自由学園、嘉悦大等)と連携して様々な事業を行いました。また、「たまろくとグルメフェスティバル」の実施など従来の枠を越えた取り組みも始まっています。指定管理者による一体的な運営体制3年目となり、大きな企画展を内部で作りに上げていくという形が出来上がりつつあります。春の企画展「くらしの中の20のしくみ展」、夏の企画展「夏だ!とびこめ!魚ワールド」と、集客を課せられる時期の企画展をオリジナルの内容で乗り切ったことは、スタッフの育成という観点からも価値があると言えるでしょう。

広報面では、大きく2つの課題を挙げます。ひとつは、一昨年のプラネタリウムと展示室のリニューアルをきっかけに増加した来館者数を、維持・向上させていくこと。もうひとつは、これまで当館に足を運ぶことのなかった層にアプローチし新規の来館につなげることです。来館者の約4割が事前に参照しているウェブサイトや年5回各20万部発行しているロクトニュース、ポスター、チラシなど、ウェブ媒体・紙媒体の更なる充実を図りました。それらに加え、今年度は毎年秋に実施しているシニア向けキャンペーンの対象を従来の65歳以上から60歳以上に拡大し、合わせ

て、新聞の折り込み広告などこれまで使ったことのなかった媒体を通じての広報を実施したことが特徴です。

昨年の同期間に比べて平日の個人での来館者数が約2倍となり、この施策は比較的奏功したと言えます。ドーム映像「富士の星暦」の訴求力が同キャンペーン対象者の世代に強く作用したこともその要因の一つです。

また、同じく広報面で特筆すべきこととして、メディアからの取材回数が前年度に比べ倍増していることにも触れておきます。これは適切なタイミングでプレスリリースを行い、記者等との良好な関係を構築するよう努めたことが反映したものと推察されます。

ソフト面(運営面)での新しい取り組みをいくつかご紹介しましたが、その中でも外部の方から多くの関心が寄せられていると感じるのは、来館者へのアンケート調査の手法を新たに整えた点です。一昨年末で用紙を据え置きする方式だったものを、昨年からは、スタッフが退館ゲート付近で声掛けして協力してもらう方式に変更。1年間で全来館者の約1%にあたる2000件ほどの回答を集めます。偏りの無いサンプリングを行うことで信頼度の高い情報が得られるようになりました。さらに今年度からは集計作業の効率を上げるために、紙ではなくタブレット端末を使って回答してもらう形をとっています。調査結果を、企画や広報面にフィードバックし、館のより良い運営を実現していきたいと考えています。

最近の活動報告

国立天文台天文機器資料館 大島紀夫

国立天文台では、一大イベントとして、毎年10月に特別公開、「三鷹・星と宇宙の日」を開催しています。これは、年に1回の開催で、各プロジェクトが趣向を凝らしてそれぞれの研究を分かりやすく紹介しています。共通の企画としては、スタンプラリー(景品付き)、講演会、観望会などがあります。今年度は、10月の24日、25日に行われました。今回は、晴れの天気にも恵まれて開催以来最高の4,768名の来場者があり、張り切って対応をしていました。私達の一番身近な太陽など恒星は、可視光だけでなく、紫外線、電波など電磁波を出しています。見えるのは可視光だけですが、電波は見えないので、実際にパラボラアンテナを太陽に向けて、信号が上がるのを体験していただいたり、中には、中華鍋をアンテナ代わりに使い、電波を受信しているプロジェクトもありました。また、銀河をカードゲームにして、相手を見つけて対戦し、勝つと相手のカードを取れるとあって、子供達は相手探しをして、飛び回っていました。今年のメインテーマの「宇宙のフロンティアに挑むTMT」のTMTプロジェクトでは、主鏡の口径30mと同じシートを広場に展開し、これに参加者がメッセージと署名をしていました。このように、天文学は難しい、どんな研

究をしているのだろうか?とと思っている人もいるので、天文学を身近に感じ、分かりやすく捉えていただけるように工夫しながら展示をしていました。また、観望会の望遠鏡前には、昼間も星が見えることもあり列ができていましたが、夕方にかけては長蛇の列になっていました。



平成26年度ハンセン病資料館活動報告—展示活動を中心に—

国立ハンセン病資料館 学芸部 金 貴粉

当館では常設展示の他に、企画展を年に2回行っている。今年度は春季と秋季の企画展に加え、特別企画展も開催した。

春季企画展「不自由者棟の暮らし—ハンセン病療養所の現在—」(平成26年4月26日～7月27日)

不自由者棟とは、後遺症の悪化や合併症の併発・高齢化により日常生活が困難な入所者が暮らす建物である。援助のための設備を備え、介護員・看護師が常駐している。本展では、患者が患者を介護していた時代から不自由舎看護職員切替えへと変わる歴史を伝えると共に、現在の入所者の暮らしを実物資料やパネルで紹介した。付帯事業では山内和雄沖縄愛楽園園長をお招きし、講演会「沖縄愛楽園の不自由者棟」を開催した。



「病棟を見舞う」1961年 多磨全生園



展示風景

秋季企画展「この人たちに光を—写真家趙根在が伝えた入所者の姿—」(平成26年11月16日～平成27年5月31日)

1960年代から1980年代まで全国10ヶ所の療養所で撮影を行った写真家趙根在の写真を紹介した。趙は入所者の姿を社会に伝えることを自身の使命と感じ、彼らとの強い信頼関係の中、感覚のない指の代わりに舌と唇で点字を読む視覚障がい者や入所者の葬送、患者運動など入所者の写真を撮り続けた。付帯事業では趙と交流のあった多磨全生園入所者である大竹章氏をお招きし、講演会「趙根在の写真を語る」を開催した。

特別企画展^{リンチミン}「林志明作品展—中国ハンセン病回復者の書画活動—」(平成26年4月5日～5月11日)

中国のハンセン病回復者であり、執筆家、画家としても活躍している林志明氏の中国画や書の作品と中国国内のハンセン病事情について紹介した。林氏は苦難の中でも生きた自身の証をのこすために、これまで丹精込めて花や動物を描いてきた。付帯事業では、中国から林志明氏をお招きし、講演会「私と書画活動」を開催した。



林志明氏と作品

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩8分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町33	042-622-8939	JR中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車
府中市郷土の森博物館	府中市南町6-32	042-368-7921	京王線・JR南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車
町田市立博物館	町田市本町田3562	042-726-1531	小田急線・JR横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町1-684	0428-23-6859	JR青梅線「青梅駅」下車徒歩12分
調布市郷土資料館	調布市小島町3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩5分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑1962	042-568-0634	JR八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩20分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原5	0428-86-2731	JR青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川850-1	042-530-1120	JR青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩7分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山市本町5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩1分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市920	042-596-4069	JR五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩17分
羽村市郷土博物館	羽村市羽741	042-558-2561	JR青梅線「羽村駅」西口下車徒歩20分／コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩10分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町3-12-34	042-525-0860	JR中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩5分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村3221	042-598-0880	JR五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行か藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩5分
小金井市文化財センター	小金井市緑町3-2-37	042-383-1198	JR中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環⑬「小金井公園入口」下車徒歩5分
くにたち郷土文化館	国立市谷保6231	042-576-0211	JR南武線「矢川駅」下車徒歩8分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス(イオンモール行き)または都営バス(青梅車庫行き、箱根ヶ崎行き)で「八幡神社」下車徒歩2分／多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り「八幡神社」下車徒歩2分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町2-24-16	042-388-7163	JR中央線「東小金井駅」南口下車徒歩9分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町3-7-1	042-388-3300	JR中央線「武蔵小金井駅」北口から西武バス「小金井公園西口」か関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中1-9-52	042-574-1360	JR中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町1-1	0428-78-8814	JR青梅線「御嶽駅」下車徒歩20分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩5～7分
集合住宅歴史館(都市再生機構)	八王子市石川町2683-3	042-644-3571	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩5分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車徒歩18分／西武新宿線「田無駅」北口からはなバス「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
コニカミノルタサイエンスドーム(八王子市子ども科学館)	八王子市大横町9-13	042-624-3311	JR中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」北口から西東京バス「杏林大学」・「戸吹」・「みついで」行き等「福祉会館」下車徒歩2分
国立天文台天文機器資料館	三鷹市大沢2-221-1	0422-34-3962	JR中央線「武蔵境駅」から小田急バス「狛江駅」行き「天文台前」下車／京王線「調布駅」から小田急バス「武蔵境駅」南口行き「天文台前」下車
首都大学東京91年館	八王子市南大沢1-1	042-677-1111	京王線相模原線「南大沢駅」下車徒歩5分
狛江市立古民家園(むいから民家園)	狛江市元和泉2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」より徒歩10分／小田急線「狛江駅」北口より「多摩川住宅」行バスで「児童公園」下車

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩 No.36

発行日 2015年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2014年度会長 パルテノン多摩歴史ミュージアム
多摩市落合2-35 042-375-1414

編集委員 たましん歴史・美術館：坂田宏之
集合住宅歴史館：牛島 毅・溝口 忠
多摩六都科学館：安倍覚子
東京都埋蔵文化財センター：松崎元樹・小西絵美